研究ノート

『アイヌ写真帳』の比較

平取町立二風谷アイヌ文化博物館所蔵本と国立歴史民俗博物館所蔵本

Comparison of “Ainu Photo Collections”: Collections Owned by the Nibutani Ainu Culture Museum in Biratori and the National Museum of Japanese History

MORIOKA Kenji

森岡健治

はじめに

1942（昭和 17）年 4 月 11 日午前 9 時 23 分，医師として多くの人々の診療にあたり，また人類学者として日本の考古学会やアイヌ文化に数多くの研究業績を残したひとりの帰化英国人ニール・ゴードン・マンロー博士（以下「N・G・マンロー」とする）が，北海道平取町二風谷で逝去した。

彼の功績はここで語るまでもないが，逝去後，博士自身が撮影または撮影を企画依頼した写真が多く含まれるネガ等を文化庁（国立歴史民俗博物館設立準備室）が平取町の冨士写真館[(1)]から「北海道沙流川流域のアイヌ風俗写真原板」390 枚及び写真帳として 1979（昭和 54）年に買収し，後に国立歴史民俗博物館（以下「歴博」とする）に保管された。これら資料群のうち，写真帳はその奥付から N・G・マンローの逝去後に社団法人北海道アイヌ協会平取支部によって発行されたものであることが分かっている。

本稿では，平取町立二風谷アイヌ文化博物館（以下「二風谷アイヌ文化博物館」とする）が所蔵する 1952 年に発行された写真帳（以下「二風谷写真帳」とする）と，その後 1955 年に発行された歴博が所蔵する写真帳（以下「歴博写真帳」とする）及びネガとを照合し，これまでどの写真が N・G・マンロー自身が撮影もしくは自身の企画により撮影されたものであるのか不明であったが，写真やネガを比較検討することで，その問題を解決する糸口としたい。なお，歴博が所蔵するネガの内訳については，ガラス乾板でサイズが約 12×16.5 cm のもの 54 枚，同じくガラス乾板で約 8×10.5 cm のものが 269 枚及びニトロセルロースフィルムで約 8×10.5 cm のものが 67 枚，合計 390 枚である。また，個々の写真を比較，検討するにあたって，二風谷写真帳には頁番号やキャプション No. が付されているものと付されていないものが，歴博写真帳には頁番号及びキャプション No. が付されていないため，便宜的に二風谷写真帳の表紙及び個々の写真に「二−1 ～ 100」の番号を，歴博写真帳の表紙及び個々の写真に「歴−1 ～ 82」の番号を順次付し，それぞれ表 1 及び表 2 に写真と解説を表記した。ただし，写真帳に掲載されている解説については，二風谷写真帳は旧字体の活字印刷であるため，極力原文を尊重しつつも文字変換の都合上便宜的に新字体に修正しながら掲載し，歴博写真帳の解説文は手書きのためそのまま転写し，縮小または拡大して表示した。

1. 二風谷写真帳（1952 年版）の概要（表 1 参照）

装丁は厚手の黒革装風で，表紙タイトルには「AINU」と印刷されている（表 1　二−1）。写真帳の形態は横型で，26.5 cm×36 cm，厚さ 3.5 cm を測る。

中表紙には，「北国の神秘を語る　アイヌ写真帳　1952　社団法人　北海道アイヌ協会平取支部」と記載されている（写真 1）。

序文は，発行人である冨士元繁蔵氏が写真帳を発刊するに至った経緯等を 1951 年 10 月 8 日付けで記載している。しかし，この写真帳に掲載されている写真については，「コタンに行事があるとカメラを持ち出したり，或は頼まれたりして得た」ものとして，N・G・マンローによる撮影または企画によって撮影された写真であることはいっさい触れられていない。また，「これらの原板は其の後相当な数量に達したが，不幸にして昭和十八年平取大火の際罹災して大半を失った」ことが大きな原因で，写真帳を発刊するきっかけになったとしている。序文の裏面には写真帳の目次が記載されており，第一編は「熊祭りの儀式と記録」（1 ～ 8 頁），第二編に「アイヌの祭儀に使用される木幣，神体について」（9 ～ 17 頁），第三編に「風俗，習慣に関する収録」（18 ～ 37 頁）という構成になっている。

写真1　二風谷写真帳の中表紙

写真帳に貼付されている写真は全 99 点（組写真も 1 点とした）を数える。その内訳は，目次によれば第一編で 27 点，第二編で 17 点，第三編で 50 点の計 94 点となるが，このほかに第一編及び第二編の始めにそれぞれ巻頭写真のような扱いで 1 点ずつ（二−2，二−30）貼付されている。さらに発行後と推察されるが，23 頁にキャプション No. の付されていない写真が 1 点（二−59），35 頁には次頁と重複するキャプション No. 89 が 1 点（二−93），37 頁には前頁に空きスペースが無かったために貼付されたと思われるキャプション No. の付されていない写真が 1 点（二−100）ある。また，ネガについては，二−99 のうち「男子墓標」とされる以外はすべて歴博が所蔵するネガ 390 枚の中に所在することが確認された。

写真帳の 1 頁に貼付されている写真は，おおよそ 1 ～ 4 枚である。写真のサイズは二−2，二−30，二−48 が約 14.5×23.5 cm，他は手札サイズ（7.5×11 cm）前後またはそれに近い任意のサイズである。印画紙も前述の 3 点のみ絹目の印画紙を使用し，他は光沢紙で焼かれている。解説文は活字で印刷されており，見開きの片面に写真，もう一方に解説文という構成で 1 頁としている。なお，前述した二−2，二−59，二−93，二−100 には解説がない。

奥付には，以下の内容が記載されている。

北国の神秘を語るアイヌ写真帳（1952 年版）
―日高国沙流川流域を中心とせる―
昭和二十六年十一月二十五日　印刷（非売品）

昭和二十六年十一月 三十 日　発行　禁　転載, 複写, 複製
発行人　冨士元重蔵
解説, 編集人　平村幸雄
印刷人　中西慎吾
印刷所　中西写真製版印刷所
発行所　社団法人北海道アイヌ協会
平取支部
北海道沙流郡平取村

これら全 99 点の写真のうち，歴博写真帳に貼付されている写真と同一のもの，あるいは同一のネガから焼かれたものであると判断されるものは 53 点であった。

2. 歴博写真帳の概要（表 2 参照）

装丁は厚手のフェルト状で, 表紙には丘の上に建つ赤屋根の教会風建物がデザインされ,「想いで」と表示された既製の写真帳である（表 2　歴−1）。写真帳の形態は横型で, 23 cm × 32 cm, 厚さ 4.5 cm を測り，二風谷写真帳よりひとまわり小さい。

貼付されている写真は全 81 点（うち 2 点剥落）である。このうち歴博所蔵のネガにないものは，二風谷写真帳二−99 同様に「男子墓標」のほか，歴−8，60 ～ 62，66 ～ 72 の 11 点である。1 頁に貼付されている写真は，1 点のみというものが 4 頁，2 点貼りが 32 頁，3 点貼りが 3 頁，4 点貼りが 1 頁である。写真のサイズは二風谷写真帳同様，歴−2，歴−12，歴−22 のみ意図的に大きめのサイズとしている。ただし，歴−2 は剥落しているので，その痕跡から推察した。目次・頁・キャプション No. は付されておらず，歴−2 から数えて歴−82 まで 40 頁となり，解説はすべて写真の脇に手書きで記載されている。裏表紙には註書き及び奥付が複写用紙でそれぞれ貼付されている。この註書きには「この写真帳の写真は北海道沙流郡平取町冨士写真館主　冨士元繁蔵氏が撮影したもので故マンロー博士の企画されたもの（46 枚）も相当多く使用された　余りの大部分のものの記録写真は折りにふれて平村幸雄が指導して撮影させて全部に解説を加えた。」と記述されている。また，奥付には以下の内容が記載されている。

北国の神秘を語るアイヌ写真帳
日高国沙流川流域を中心とせる
（1955 年　普及版）
昭和三十年十月一日発行（禁・転載・複写・複製）
発行人　冨士元重蔵
解説, 編集人　平村幸雄
発行所　社団法人北海道アイヌ協会
平取支部
北海道沙流郡平取町

二風谷写真帳の奥付と比較してみると，「非売品」では無くなり，“1955年　普及版”となっていることから昭和30年に増刷したものと思われる。ただし，印刷人及び印刷所は記載されていないこと，写真帳が既製のものであること，写真解説がすべて手書きであることなどを考慮すると，歴博写真帳は二風谷写真帳を発行した後に，手作りの写真帳として再発行したものと推察される。そのため，発行部数や販売目的があったかどうかは不明である。また，二風谷写真帳ではN・G・マンローのことがいっさい触れられていなかったのに対し，歴博写真帳では註書きを貼付するという変化が伺われる。

3. 両写真帳の共通写真（表3参照）

二風谷写真帳の53点と歴博写真帳の56点が歴博所蔵の同一ネガからプリントされたものと判断される。ニトロセルロースフィルムからプリントされたものは，二−2と歴−2，二−29と歴−11，二−31と歴−13，二−40と歴−74，二−41と歴−75，二−42と歴−76，二−44と歴−77の7組で，他はガラス乾板のネガからプリントされている。上記7組の写真のうち，歴−2の写真は剥落していて手書き解説のみであったが，その解説内容から二−2と同じ写真が貼られていたと判断した。また，二−2と歴−2に使用されたネガを除く，6枚のネガ（資料番号：F-387-2-2-176，F-387-2-7-66，F-387-2-7-67，F-387-2-7-71，F-387-2-7-74，F-387-2-14-181）には二風谷写真帳に付されたキャプションNo.が書き込まれている（写真2）。

写真2　F-387-2-7-74に書き込まれたキャプションNo.（○印）

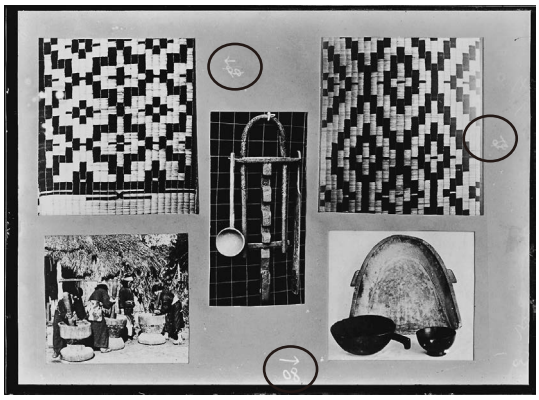


写真3　F-387-2-12-385に書き込まれたキャプションNo.（○印）

ガラス乾板からプリントされたもののうち，ネガサイズが約12×16.5 cmのものは13枚である。このうち二−48と歴−22に使用されたネガを除いた12枚のガラス乾板（F-387-2-3-366，F-387-2-12-209，F-387-2-12-217，F-387-2-12-381，F-387-2-12-383，F-387-2-12-384，F-387-2-12-385，F-387-2-14-195，F-387-2-14-373，F-387-2-14-377，F-387-2-17-326，F-387-2-17-327）には二風谷写真帳に付されたキャプションNo.が書き込まれている（写真3）。

また，二−46と歴−78，二−48と歴−22，二−73と歴−40，二−74と歴−39，二−97と歴−52･53を除く7組の写真のネガは，明らかに数枚の写真を複写したネガから写真帳のプリントを作成している。これらのうち，二−60と歴−29及び二−61と歴−28は，6枚のプリントを複写したネガを使用し，それぞれ1点ずつを部分的にトリミングしてプリントしている。

二−65 と歴−33 に写ったものは，約 12×16.5 cm サイズと約 8×10.5 cm サイズのネガが 1 点ずつあるが，大判のネガ（写真 4）は機織り器具の他に機織りの状況写真も一緒に複写されたもので，もう一方（写真 5）は機織り器具のみを撮影したオリジナルネガである。しかし，写真帳に貼付されている写真には，機織り器具にそれぞれ 1. ～ 8. の写植が付されているので，このことより大判サイズの複写ネガからプリントされたことが分かる。

二−70 と歴−36 に使用されたネガ（写真 6）も 6 枚のプリントを複写したものである。縦位置ネガのうち，上段に 3 点，下段に 3 点のプリントが写し込まれており，そのうちの上段左 2 点と下段左 1 点を一枚の印画紙上に焼き込んだ可能性が高い。

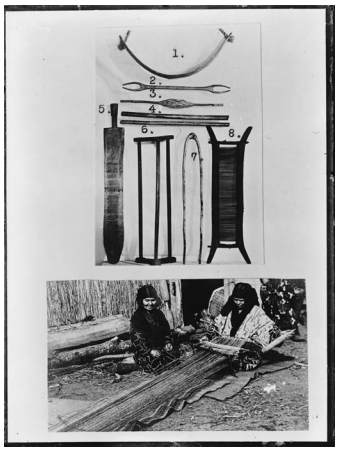


写真4　資料番号
F-387-2-3-366

写真5　資料番号
F-387-2-3-126

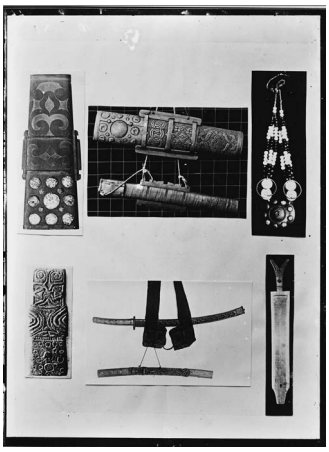


写真6　資料番号
F-387-2-12-381

二−86 と歴−46･47 は 4 枚のプリントを複写したネガ（写真 7）であるが，二−86 ではそのまま 1 枚の写真としてプリントされているのに対して，歴博写真帳ではこのネガを上下別々にプリントして 2 枚の写真としている。同様に，二−87 と歴−48 も 5 枚のプリントを複写したネガ（写真 8）で，二−87 はそのまま 1 枚の写真としてプリント，歴−48 はネガの下段のみプリントしている。

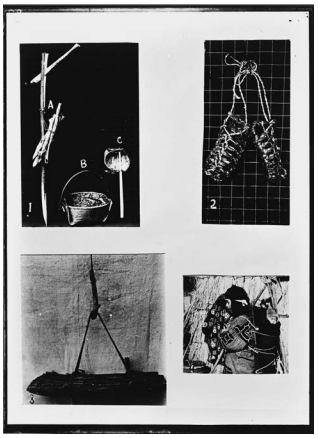


写真7　資料番号
F-387-2-12-383

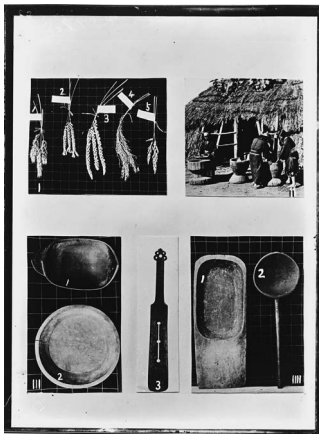


写真8　資料番号
F-387-2-12-384

オリジナルのネガのうち，二−97と歴−52･53は椅子に座って手のひらを上に向けた状態と，手の甲を上に向けた状態の婦人のネガ（F-387-2-17-326･327）から手及び腕の入墨部分のみをトリミングしてプリントしたものである。二−97ではそれらを2枚一組とし，歴博写真帳ではそれぞれ一枚ずつ貼付して使用している。

約8×10.5 cmのガラス乾板ネガからプリントされている共通写真は34組であった。他のネガ同様多くのネガには二風谷写真帳のキャプションNo.が付されており，No.が確認されなかったものは二−3と歴−3，二−30と歴−12，二−57と歴−26に使用された3点のネガ（F-387-2-11-5，F-387-2-10-64，F-387-2-8-105）だけであった。また，大判ネガ同様に複写したネガを使用したものが数点見受けられる。このうち二−12と歴−7に使用されたネガ（F-387-2-12-196）には，新聞紙をバックにプリントが写し込まれている。また，二−58と歴−25は同様のネガが2枚見られるが（F-387-2-8-99，F-387-2-8-100），いずれもプリントを複写したものである。二−100と歴−20･21は男性と女性の人物が2枚一組として貼付されている。二風谷写真帳には解説がないが，歴博の写真帳には夫婦であることが記載されている。男性のネガ（F-387-2-16-255）には「93 1」と記載されており，当初は二風谷写真帳のNo.93として予定されていたものが差し替えられた可能性がある。同様に女性のネガ（F-387-2-17-302）にも「93 2」と記載されている（写真9･10）。

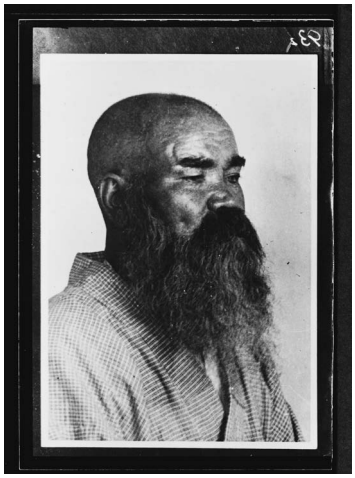


写真9　F-387-2-16-255

写真10　F-387-2-17-302

写真11　F-387-2-12-205

二−57と歴−26に使用されたネガはオリジナルと判断したが，歴−26は写真が剥落している。ただし，両写真帳の解説には「輪舞（ホリッパ）」の記載があるので，おそらく二−57と同じ写真が貼付されていたものと推察される。

二−71と歴−37は屋外にて白布をバックに撮影されたネガ（写真11）が使用されているが，ネガの右側には塗りつぶしの痕がみられるため，トリミングしてプリントされている。

二−82と歴−41のネガ（写真12）は連写された写真のようで，類似のネガがもう1点存在する（写真13）。さらにこれらのガラス乾板は，ネガ同士が接合することも判明した（写真14）。これは撮影時に大判のガラス乾板をハーフサイズで連写したものか，もしくはそのプリントを複写し，現像後に切断したと考えられる。

写真12　F-387-2-3-144

写真13　F-387-2-3-145

二−85 と歴−44 はネガ（F-387-2-12-216）の左上が扇状に割れているため，三角形状にトリミングしてプリントしている。トリミングした画像が全く同じである事から，おそらく同時にプリントされたものを使用していると考えられる。

二−99 と歴−19 は男性の墓標写真と女性の墓標写真の 2 枚一組の写真であるが，ネガは女性の墓標しかない（F-387-2-9-118）。ネガの墓標根元には「2」と書き込みがされている。

写真14　接合したガラス乾板

4. 二風谷写真帳にのみある写真（表4参照）

表 4 に示すとおり歴博写真帳には使用されておらず，二風谷写真帳にのみ貼付されている写真は全 47 点である。このうちニトロセルロースフィルムからプリントされたものは，二−22，25，26，32，43，45 の 6 点，ガラス乾板の大判ネガからプリントされたものは二−75，87，95 の 3 点，約 8 ×10.5 cm のガラス乾板ネガからプリントされたものが 38 点である。ほとんどのネガには，二風谷写真帳のキャプション No. が書き込まれており，不明なものは二−51，59，79 の 3 点程度である。大判のガラス乾板 3 点のうち，二−75，87 に使用されたネガは数枚の写真を複写したものである。このうち，二−75 はプリントを 5 枚複写したネガ（写真 15）からさらにプリントされたものであるが，そのなかの「B」には別のオリジナルネガ（写真 16）が存在する。

二−87 も 5 枚の写真を複写したネガ（F-387-2-12-384）からプリントされているが，二風谷写真帳ではそのままプリントされ貼付されているのに対し，歴博写真帳では下段の部分（歴−48）のみ使用され，上段 2 点は使用されていない。

二−95 は「口周入墨」として貼付されているが，ネガ（F-387-2-17-327）は膝の上から両腕の入墨も含めて写し込まれたオリジナルネガであり，二−97 や歴 52･53 では同じネガ（F-387-2-17-326･327）を用い「腕入墨」としてトリミングしたプリントが使用されている。

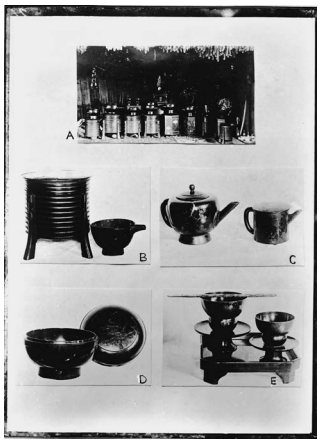


写真15　F-387-2-12-386

写真16　F-387-2-12-212

約8×10.5 cmのガラス乾板ネガでプリントされたもののうち，二-33は露出の異なるネガが3枚（F-387-2-2-149･150･151）あるが，写真帳に使用されたネガ（写真17）にはキャプションNo.が書き込まれている。また，これとは別に二-33を含む数枚のプリントを複写した大判のネガ（写真18）も1枚確認されている。

写真17　F-387-2-2-151（○印内はキャプションNo.）

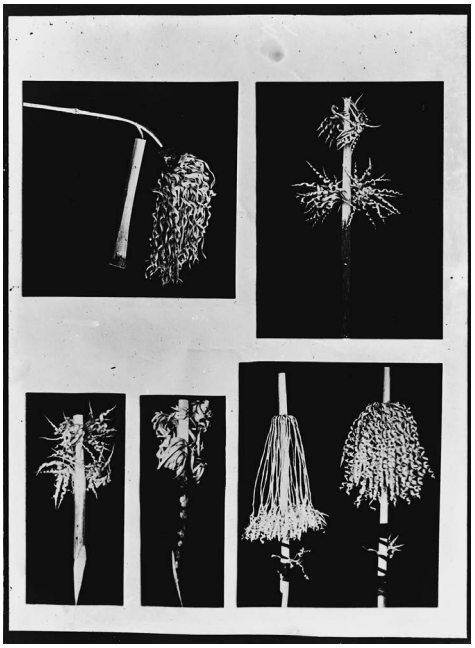


写真18　F-387-2-14-374

二-51は2枚の写真を複写したネガ（F-387-2-3-369）からプリントされたものであるが，これとは別に右の写真にはオリジナルのネガ（F-387-2-3-140）がある。二-59は写真帳にキャプションNo.が付されて無く，後に追加されたプリントと判断したものである。類似のネガは2枚（F-387-2-3-131･132）見られるが，やはりどちらにもキャプションNo.の

書き込みは見られず，ネガサイズも約 8.0×12 cm とやや大きい。二−76 は 2 枚の写真を複写したネガからプリントされているが，複写のネガは無い。左側の写真のみ，縦位置で撮影したオリジナルネガ（F−387−2−12−206）が存在し，右の写真はプリントからの複写と考えられる。二−77 は二−78 下段の写真と共に複写されたネガ（F−387−2−12−203）からプリントされており，オリジナルのネガは見られない。二−89，二−90 も複写である。二−94 は，二−95 同様に椅子に座り，手のひらを上にした状態と手の甲を上にした状態の 2 枚を撮影し，そのネガをトリミングして「口周入墨」として使用している。同時に，二−96 左側の写真では同一人物の腕の入墨を貼付している。二−98 は，左右共に別々の縦位置ネガをトリミングして一組の写真として使用している。

5. 歴博写真帳にのみある写真（表 5 参照）

二風谷写真帳には貼付されていない，歴博写真帳にのみ見られる写真は 25 点である。ニトロセルロースフィルムからプリントされたものが 2 点（歴−64･73），大判のガラス乾板からプリントされたものが 2 点（歴−17･82），約 8×10.5 cm のガラス乾板からプリントされたものが 10 点（歴−27･54 ～ 59･63･65･81）で，残り 11 点（歴−8･60 ～ 62･66 ～ 72）は歴博所蔵のネガにはなかった。歴−64 は病気を治すための呪師を撮影したもので，連写されたネガの一コマ（F−387−2−10−54）である。同様に，歴−73 も連写したニトロセルロースフィルムの一コマ（F−387−2−6−89）が使用されている。大判のオリジナルネガからプリントされた歴−17 は，その背景の特徴から N・G・マンローの撮影した写真に間違いないと思われる。歴−54 ～ 62 は同じ環境で撮影された踊りの記録写真であり，また歴−66 ～ 72 は風俗等の写真であるが，解説等から N・G・マンロー逝去後に撮影されたものと思われる。また，歴−65 は二風谷写真帳と全く同じ写真ではないにしろ，二−22，二−23 から関連する写真と思われる。歴−81 は公開基準（案）により写真は不掲載とした。このネガについては，他に類似の連写したネガ（F−387−2−4−107）もあり，写真 12 ～ 14 のように大判のガラス乾板で連写したか，複写したものを現像後に切断したとも考えられる資料である。

6. まとめ

以上，両写真帳の概要を述べながら，各写真と歴博所蔵ネガの照合をしてみた。その結果，二風谷写真帳に貼付された写真については，二−99 に使用された「男性墓標」のネガ以外はすべて確認された。ただし，二−76 については，2 枚の写真を同時に撮影したネガがないことから，左側のオリジナルネガ「首飾玉，耳飾輪」と，右側の複写された別のネガのモンタージュによってプリントした可能性もある。いずれにしても，二風谷写真帳を制作する際には，目次にそった写真を多数のネガから吟味，抽出され，その上でネガにキャプション No. を書き込み，当初からほぼ目的にそったプリント作業がなされていたものと推察される。ただし，「二風谷写真帳（1952 年版）の概要」でも若干触れたが，N・G・マンローの逝去後 10 年を経て出版された写真帳の序文には，掲載写真についてそれがマンローの撮影または企画による写真であることはいっさい記述されておらず，むしろ発行者である冨士元繁蔵氏の写真が大多数であるかのようにも読みとれる。また，写真帳を発刊する契機となったのは，昭和十八年の平取大火によるところが大きいともされ，N・G・マンローの功績とは別の事情から発刊されているようにも見受けられる。

一方，歴博写真帳は，二風谷写真帳と同じ「男性墓標」のネガ以外に，11点の写真ネガが所蔵されていないことが確認された。さらに歴博写真帳には目次がないことから，二風谷写真帳と共通する写真であっても，貼付される順序が違っていたり，新たな写真が加えられたりしている。このことはまさに奥付にも記載されているとおり，二風谷写真帳が発行されたのちの「普及版」の意図が伺われる。たとえば，二風谷写真帳の第一編「熊祭りの儀式と記録」では二-3～29（27枚）の写真を使用し詳細に解説されているが，歴博写真帳では歴-3～11（8枚）の共通する写真に，歴-8を加えたのみとなっていて，解説も要約されている。また第二編の「アイヌの祭儀に使用される木幣，神体について」では二-30～47（18枚）を用いて木幣や呪法等を紹介しているが，歴博写真帳では歴-12～18で木幣と御幣という限定的なものとなっており，第二編で共通した歴-74～79は別の意図で扱われている。さらに二風谷写真帳の第三編「風俗，習慣に関する収録」では二-48～100（53枚）を用いて家屋・発火器具・人物・踊り・機織り・衣類・宝物等の民具・狩猟具・その他の風俗等を多数収録しているのに対し，歴博写真帳では新たに各種の踊りや挨拶等が加えられている。こうして新たに加えられた写真は，解説の内容等から判断して裏表紙の註書き記載された「故マンロー博士の企画されたもの（46枚）」の写真には該当しないものであろう。むしろ二風谷写真帳と共通する56点のなかにN・G・マンローの写真が含まれる可能性が高いと考えた方が妥当ではないだろうか。

いずれにしても両写真帳に貼付された写真は，歴博所蔵ネガ390枚の1/3程度しか使用されていない。今後，N・G・マンローが撮影または撮影を企画依頼した写真をさらに絞り込むためには，N・G・マンローが生前に母国に送った写真などとも照合することによって，より確実的なものとなろう。また，今後の課題として，類似の写真帳が北海道大学やイタリアのフィレンツェ民族学博物館（フォスコ・マライニ所蔵）等に所蔵されていることから，それらとの比較，検証も行い，写真帳を発刊されたことの意味，非売品と普及版のねらいについても調査が必要であろう。また，390枚のネガの中には相当数の複写ネガが見受けられたが，これらは平取大火によって罹災したネガを補うためだったのかどうか，加えて写真14で示したような新たな事例が他にも見つかる可能性が極めて高いことから，再度ネガ原板を詳細に調査し，ガラス乾板ネガの接合，当時の撮影方法や複写方法，ネガのオリジナル性についても詳細に検証していく必要がある。

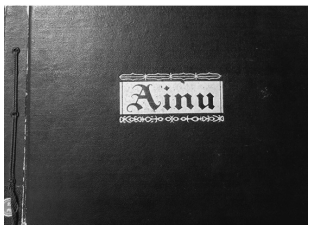
註

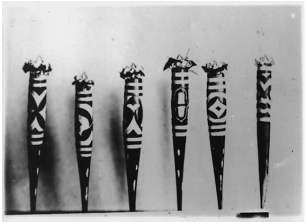
（1）――二風谷写真帳及び歴博写真帳には“富士写真館”・“富士元重蔵”と記載されているが，本稿記載が正しい。

（沙流川歴史館，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2010年9月27日受付，2011年2月21日審査終了）

表1　平取町立二風谷アイヌ文化博物館所蔵の写真帳解説内容

No.	頁		キャプションNo.	キャプション(日本語・アイヌ語)及び解説内容
二−1	表紙			Ainu
二−2	巻頭		無	無
	1			アイヌ民族の熊祭りの意義 漁狩猟民族であるアイヌにとって，獲物に対する供養の祭儀は，極めて重大な意義を有する。特に，その捕獲する動物が彼等の生活と密接な関連(註1)をもつ場合には，その際は荘厳を極めるのである。飼養された熊・狐・鴉（カララク）(註2) 及び狩猟された前記の動物の外狸・貂・梟・鷲・鷹等の霊魂をその本国に送るための霊送りの祭儀がそれぞれの神格に応じて盛大に執り行われるのであるが，中でも特に重要なのは熊の霊魂を送る祭儀である。 （註1）若しその動物が或部族（sani　又は　sani-ke　又は　sanikiri）の象徴である場合。 （註2）「カララク」は嘴の細い鳥（ハシボソガラス）で熊が鳥を呼ぶ際「パスクル・ケウスツ」（鳥伯父さん）と呼ぶと云われて居る。
二−3			No.1	熊檻　ペウレプ・チセ 檻の傍に立つて居るのはこの仔熊の飼主即ち養父である。 Peurep-chise.　Cage for the bear.
二−4			No.2	別れの言葉を告げる　ヘペレ・カシパオツテ 仔熊に向つて，今日只今よりイヨマンテ（霊送りの祭儀）の儀式が行われて，養父母たるアイヌの両親の膝下を離れ，天なる父母の神の許へ帰るべき旨を，酒杯をあげて厳かに伝える。 Heper-kashipaotte.　Giving farewell words to the bear.
二−5			No.3	仔熊の守護神に祈る　スツ・イナウ・カムイ 檻に飼われている仔熊に魔神「ケナシ・ウナルペ」(註3) が憑くのを防ぐために守護神として勧請されて居る棒幣の神に，今日熊祭りの行われることに依り任務の終了する事を告げると共に無事儀式の進行する様，加護を願うのである。この時の祭主は初めの勧請主である。若しその人が出来ない場合はその立会者が行う。 Sutuinau-kamui.　The fetish to keep the bear from being possessed of the devil “Kenashi-unarpe.” （註3）「ケナシ・ウナルペ」は「ハシナウ・カムイ」の伯父（ウナルペ）に当るが悪い神である。
二−6			No.4	檻の中の熊に綱をつける　ツシ・コレ 二筋又は，それ以上のイラ草製の綱を輪にして仔熊の肩に襷に掛けてX状に縛る。盛装せる老人は飼主で仔熊の守護神たる棒幣を捧げている。仔熊の機嫌のいい時には直ぐに「ツシウク」tush-uk（綱を取ること）をするが何か気に食わない時は仲々この式は進行しない。そうゆう際は，この仔熊の喜ぶような人が交替して綱つけをする。 Tush-kore.　Roping the bear in the cage.

二−7	2		No.5	檻より仔熊を出す	ペウレツプ・アサンケ
			綱をつけられた仔熊は檻の棟木を引き抜いて檻の上から外に出される。 Peurep-asanke.　Taking the bear out of the cage.		
二−8			No.6	祭壇の祈り	カムイ・ノミ
			左方の人は「ヌサコル・カムイ」(幣場の神)，中央の人は「ラムヌサ・カムイ」又「シランパ・カムイ」(森の神)，右方の人は「ハシナウ・カムイ」(狩の神) 及び「ワツカウシ・カムイ」(水の神) に対して儀式の前祷を捧げている。この儀式が終つてから仔熊を檻から出す。 Kamui-nomi.　Saying prayers to the gods. (註) ラムヌサ・カムイとハシナウ・カムイとの序列は所によっては逆の場合もたくさんある。		
二−9	3		No.7	聖祭壇	ヌサ
			キムン・カムイ (Kimun-kamui, 山の神) の好むイナウ (inau　木幣)，乾鮭，宝刀，飾り玉，及び祭に使用する器具が飾られる。 Nusa.　Clusters of wood fetishes offered to the gods.		
二−10			No.8	仔熊を遊ばす	イパシテ
			仔熊が嬉しげに駈けまわれば,「シノテアシカイ」(shinot-e-ashkai　遊び方が上手だ) と称し，仔熊の気分がよいのだと老人達は喜んで花矢を射て祝福する。この儀式が非常に長時間に亘り，仔熊が非常に疲労し休止しようとすると手草 (takusa) を以て誘いながら続ける。 Ipashte.　Letting the bear run about.		
二−11			No.9	花矢を射る	ペウレツプ・アイ・ツカン
			仔熊を射た花矢或は其の体に触れさせただけの花矢であつても人々はこれを記念して大事に保存する。 Peurep-ai-tukan.　Shooting ornamental arrows to the bear.		
二−12			No.10	花矢	ペウレツプ・アイ
			ノリウツギの木で作り先に赤い布を小さく削りかけた木で差込んでとめて置く。 Peurep-ai.　Ornamental arrows used in the bear festival.		
二−13			No.11	仔熊に止めの矢を捧げる	ペウレツプ・アイ・ウツク
			飼主より選定された武勇あり，又信望厚き光栄ある数人の人が各々一乃至二本位の矢を以て心臓部を射る。熊はこれを喜んで受ける事に依つて死ぬ事が出来る。この場合毒矢は絶対に使用しない。 Peurep-ai-uk.　Shooting arrows to kill the bear.		

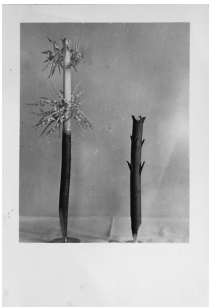
二−14	4		No.12	圧殺	イテイエ
			仔熊のまだ絶命しないうちに「オク・ヌンパニ」(ok-numpa-ni, 首搾木) で首を挟で絞め殺す。この時「イスムカ・アイ」(isumka-ai) を東南方へ祭壇正面より射る。 I-teye.　Clamping the bear's head between logs.		
二−15			No.13	仔熊の綱を縛る杭	ツシ・コツ・ニ　或は ヅシ・ウク・ニ
			これには必ずキワダの木を用い，頂上に笹の葉や松枝の手草と木幣を附ける。 仔熊がこの棒の頂上に手をかける事は非常な不吉な事とされ，仔熊が檻より出された直後の動作と共に特に注意され，その動作によつてコタンの吉凶を判断する。 Tush-kot-ni.　The post to which the bear is tied with a cord.		
二−16	5		No.14	守護神を送る	スヅイナウ・ホプニレ
			仔熊の守護神として勧請してあつた「スヅイナウ」に，仔熊が霊となつた旨，お禮を述べて霊送りする。 Sutuinau-hopunire.　Letting the patron god of the bear retire.		
二−17			No.15	皮剥ぎ	イリ
			下顎，前肢，正中線に沿つて性器，肛門を避けて尾のつけ根に至り前記の順に頭部を残して剥皮する。 Iri.　Skinning.		
二−18			No.16	仔熊の霊送り	ホプニレ
			仔熊の神霊を送り終つた所。肉体を離れた霊（ramat）は屍体の耳と耳との間に休で居る。この「ホプニレ」と云う語は，動植物，什器等すべての霊魂を霊界に送る事の総称である。 Hopunire.　Letting the spirit of the bear go back home.		
二−19			No.17	女子の踊り	ハラルキ
			仔熊の霊を慰めるために婦女子達が「ハラルキ」を踊る。 この他の踊りでは，「ホリツパ」(舞踊行進) があり，屋内では「フンペヤンナ」(鯨が寄り上がつているよ) の踊りがある。磯に打上げられた鯨に鼠が寄つて来る，すると死んだ筈の鯨が生きて立つ一，鼠は驚いて四散する，という踊りである。鯨と人との対照を，人と鼠によつて表現したものである。鯨になつて横たわるのは老婦人である。 Hararki.　Women dancing a dance called "hararki".		
二−20			No.18	神に肉を捧げる	カム・エイメク

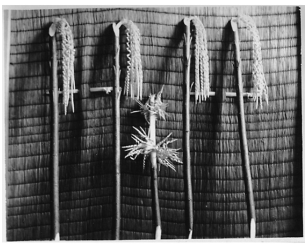
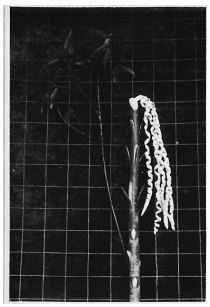
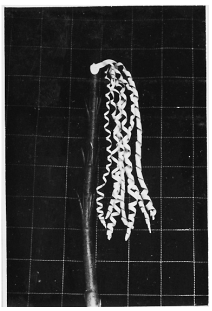
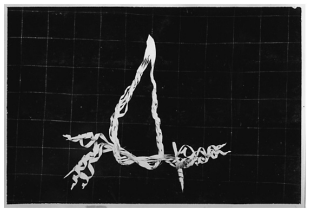
山野の狩猟の祭は祭壇下記の二神を勧請する。飼熊の時は聖壇中の三神に肉を下表に示す矢印の様に供える。

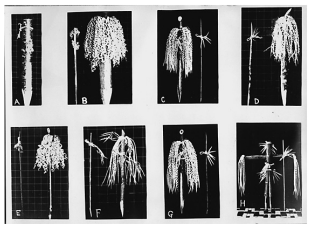
飼熊の場合		神の名		
		ヌサ↑	ラムヌサ↑	ハシナウ↑
肉名	和名	胸筋	濶背筋	心臓
	アイヌ名	ラプラプ	セツルキリプ＼	／サンペ
狩猟熊の場合		ラムヌサ↓	ハシ↓	ナウ
		神の名		

Kam-e-imek　Serving out meat to the gods.

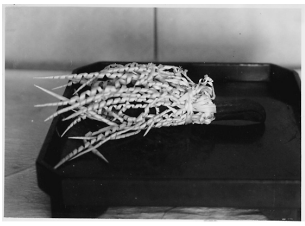
二−21			No.19	血の分与	ケム・アフプカル
			胸腔内の血液はこれを採つて病弱者に与える。普通 500 cc から 800 cc 位である。10 人−20 人位の人々に頒ち与えることが出来る。この場合酒杯に入れて取扱い「ラムヌサ」に「ペウレプ・ケム」を薬として頒けて頂く事を酒を捧げると同じくし，残りを頂く旨祈る。 Kem-ahupkar.　Drinking the bear's blood fresh from the thorax.		
二−22	6		No.20	酒宴	イクソ
			総ての神々に酒と木幣を捧げて喜びを共にし，特に今日神の仲間入りをした仔熊が，その供物，食物を父母なる神に捧げて養父母の徳を讃えるように祈願すると共に，再び人々に狩られて今日の様な盛大な祭をして戴くようにして欲しい旨を申し述べる。 Iku-so.　A drinking feast.		
二−23			No.21	肉の饗応	ウエソプキ
			宴席正面に清水にて洗い浄められ（カルカルしたと云う）神となつた仔熊の頭部が著皮のまま飾られ熊肉は炊き，一杯飯，煙草等と共に供え（供物は♂は左，♀は右に箸を置く），肉は全員が食する。肉は「マラプトカム」と云い，徹夜の宴が行われ，女子は物語（カムイユカル，ウエペケル），祭唄（ウポポ），を歌い，踊り（ホリツパ，フンペヤンナ）を踊る。男子も唄（サケハウ）と踊り（タプカル）を行う。男の「ユカル」は必ずに語り終えずに置く。それは残りの語りを聞き来ると云う迷信である。（死人のときは語り終えるのであるが―） Uwesopki.　Sitting facing one another at the feast.		
二−24	7		No.22	頭造り	ウメムケ，ウム−メンケ
			ウメムケ―調髪するの意。屋内にて頭部を剥皮し脳漿を取り出し（♀は右後頭部，♂は左後頭部），耳，舌，鼻(註)，等を木幣の削り花（イナウキケ）にて型取り，髪を作り，東窓より屋外に出す。捧持したのは「カムイサパ」又は，「ヘペレサパ」（熊頭）。図の二本の飾木幣（キケチノエ）を「ケウヅム・イナウ」（Keutum-inau）と称する。（耳と耳との間に鎮座した霊（ramat）に捧げるため） Umemke.　The bear's head decorated with pieces of willow shavings. （註）正しい昔のし来りは耳は半ばまで，眼，瞼，鼻，口唇は剥皮しない。		
二−25			No.23	頭飾り	
			Y 字型の木（ハシドイ）「ユク・サパ・ウン・ニ」（Yuk-sapa-un-ni）が上顎の間隙に入るようにして顎の下にY字の交叉の上に柳の細木「オツプメウシニ」を「イナウキケ」を以て横に結縛安定して，♂なれば性器（睾丸陰嚢）を左に，♀ならば右に性器（外陰部子宮卵巣）を吊り下げ，頭部の「ケウヅムイナウ」（飾木幣）二本を，♂は左が高く♀ならば右を高くして立てる。 Yuk-sapa-un-ni.　The bear's head is placed on the pole called "yuksapa-un-ni".		
二−26			No.24	「ユク・サパ・ウン・ニ」に飾り終わった所	
			Yuk-sapa-un-ni.　Y-form pole on which bear's head is placed.		
二−27			No.25	祭壇前の踊り	タプカル
			最後に霊を慰めるために男子が踊る。唄は酒唄（sake-hau）を唄う。 Tapkar.　Dance to be played by men at the drinking feast.		

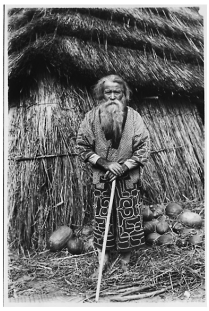
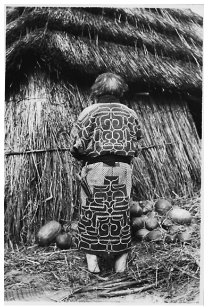
二−28			No.26	仔熊の霊に告別する	イエイタツコテ
			養父母のもとを去つて父母なる神のもとに行く仔熊の魂（Ramat）にその道中を教えて昇天を祈る。祭主は夜半家に向つて安置された熊の頭部を♂は左廻り♀は右廻りに東方に向けておき，夜明け前家紋の入った矢「イヨマンテアイ」或は「チルラアイ」を東空高く射放ち，仔熊の魂の昇天を案内する。頭部を以前の位置に廻し凡てを終える。これを「ケウホシビ」と云いこの儀式を「ケヨマンテ」と云い夜明け前にすべきである。 Iyeitakkote.　　Giving last words to the bear.		
二−29	8		No.27	祭壇	イナウ・チパ
			儀式終了後の祭壇。 Inau-chipa.　　Tha place where clusters of inau are placed.		
二−30	9		無		
			祭と祈願について　　On the festival of the Ainu people. 古来「アイヌ人」は原始的な宗教を信奉するのではあるが，特に信仰心に厚く一挙手一投足，皆神の掟に従わないものはないと云つても過言ではない。これらの宗教心に培つたものは，次の伝説の半神半人の「アイオイナカムイ」の伝説である。天地創造の神「カントコルカムイ・モシリコルカムイ」が天国より地上に派遣した神「アイヌモシリ・ヘカリモシリ・エプンキネカムイ・アランケカムイ」が山（ポロシリ）に下つて泊られたその宿泊の場所が，森の女神（チキサニカムイ）の家であつた。女神は懐妊されて誕生したのが「アイオイナカムイ」別名「オキクルミカムイ」又は「アイヌラックル」である。人間界で誕生された為にアイヌと共に住み，且つ神の子故，神の国にも，神々との交りを持たれ，アイヌ人に，漁狩猟，農事，祭り事，掟等日常の生活に必要な凡てのことを伝授して後，神の国に還られた。アイヌはその教えの詞を守り，且つその聖なる詞を以て神々に仕えているのである。従ってアイヌの創造した言葉は神に通じないと考えられている。即ちアイヌ人の聖典とも称すべき「カムイユカル」或は又「オイナ」,「ウパシクマ」の中に語り伝えられている事柄を忠実に守りつつ生活をつづけて来たのである。 A.　神々を祭る言葉,「カムイノミ・イタク」(kamuinomi-itak) 祭壇,「ヌサ」を作り新酒を醸つて神を祭る。……新築，結婚，熊祭り，祖先祭り等の喜びを神に捧げる。 B.　荒い神々に祈願する。「カムイニスク」(kamui-nisuk 助力をたのむ), 及び「ウエポタラ」(uwepotara 病気の治癒を乞う),「イチャルパ」(icyarpa　散飯をまく),「カムイケウエホンス」(kamui-kewehomsu　踊舞によつて威嚇退散させる),「ポニタク」(pon-itak　呪詛)「ムツケ・イタク」(mukke-itak　秘文) 假死者，病人，悪疫流行，難産等，疾病の平癒，息災を祈る。遺失物の発見，幸福（豊作，狩漁猟）の祈願。 悪魔悪霊調伏，夢占，霊媒による贖罪，祈願等。		
			木幣，イナウ 「チエホルカケツプ」及「キケチノエ」「キケパルセ」の各木幣には，家紋を刻む習慣があったが，今は大部分廃止され，唯酒杯に使用されるキケウシパスイ（削りかけのついた酒箸）に現存する。 Inau.　　Wood fetishes.		
二−31			No.28	左…イヌンパ・チエホロカケプ　一本(主) 右…イヌンパ・イナウ　三本(副) 一組	
			新酒を作り神々を祭る時に作られる木幣で（主）は火の女神に，（副）は三本立の一本を火の神に，二本は門の神に（「アパサムンカムイ」…呼名を「カミレタルマツ」）に捧げ，切断面凹部に酒粕(註)を載せて捧げる。 註　神に酒を捧げる時は，濁った酒或は澄んだ酒などと区別して，尚酒粕も「ペクルシラリ」（酒気の含む酒粕）「サツシラリ」（乾いた酒粕）と区別し，上位の神には濁酒とよい「イナウ」, 中位以下には「ニツネイナウ」「サツシラリ……ニツネシラリ」を捧げる。		

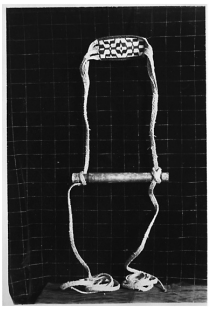
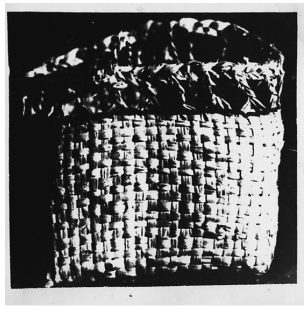
二−32			No.29	「ヌサコルカムイ・イナウ」四本，「チエホルカケプ」一本にて一組 祭壇最右翼の「ヌサコルカムイ」に捧げられる木幣
二−33	10		No.30	左…キケ・チノエ・イナウ(kike-chinoye-inau) 右…キケ・パルセ・イナウ(kike-parse-inau) 以上二本は「ヌサコルカムイ」，「ラムヌサ」，「シランパカムイ」の三神に特に捧げる木幣である。 キケ・チノエ・イナウが正式でキケ・パルセ・イナウは略式である。女性神と男性神に区別されて捧げられる様に伝われるのは根拠がない。
二−34			No.31	ハシナウカムイ・イナウ　四本一組……ハシナウカムイに捧げられる。 Hashinau-kamui-inau.　Wood fetishes for bird gods.
二−35	11		No.32	ラムヌサカムイイナウ　四本一組……ラムヌサカムイとワツカウシカムイに捧げられる同じ作りのもの。 Ramusa-kamui-inau.　Wood fetishes for the god of woods. ワツカウシカムイ・イナウ Wakka-us-kamui- inau.　Wood fetishes for the god of rivers.
二−36			No.33	シントコ・シロシ・イナウ 新酒を祝う木幣で頭（♂）首（♀）に巻き，又は掛ける。 接　待　主　「サケサンケクル」　一本 主　　賓　「サケエユシクル」　一本 接待主の妻　「サケサンケクル・マチ」　二本 主賓の妻　「サケエユシクル・マチ」　二本 計　六本 巫女「ツス・メノコ」tusu-menoko の手首，首につける「イナウ」もこれを使用する。 一本か或は二本でその巫女の憑き神の数に応じて与える。 Shintoko-shiroshi-inau.　Wood fetishes for brewing wine.

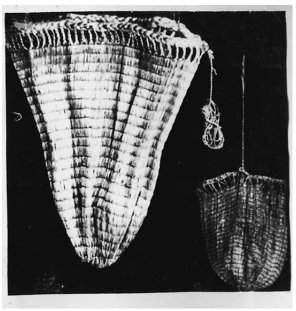
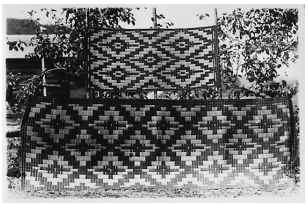
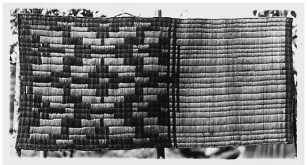
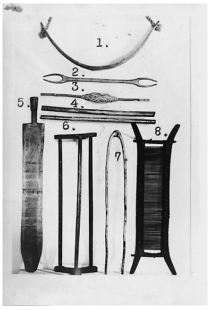
二−37	12		無	勧請する神	ニスツク・カムイ
			「ニスツク・カムイ」には必ず心臓を入れて刀，槍を持たせる。使用し終れば必ず任務解除（「ホプニレ」Hopunire）する。 心臓を入れる（入魂する）。即ち，酒杯に清水を満して，これに炉の火の一塊を入れて消し炭を作り，これを心臓（サンペ）となるべき所を削りここに擦塗する。（火の神により入魂すると考えられる） Inishuk-kamui.　Kinds of fetishes. A.　チセコルカムイ・ネトパ（Chisekorkamui-netopa） 鉢巻をし心臓を作る。 B.　チセコルカムイ（Chisekorkamui）……家の守護神 Aに「イナウキケ」をつけ「チエホルカケプ」（木幣）を副え完備した体の神。 C.　スヅイナウ（Shitu-inau） 柳を用ひ，槍，刀は蓬。……悪魔除け（一般的な悪魔である） D.　アエゾナシクル（Ayetunashkur） 俗にタランボ（セン）と云う棘のある木にて作る。……悪魔との戦の為に勧請する神。 E.　ソコニカムイ（Sokonikamui） 接骨木，槍，刀は蓬。 F.　アパサムンカムイ（Apasam-un-kamui） 槐樹を用いる。槍，刀は蓬。……家の入口の守護神。 G.　プンカウカムイ（Punkau-kamui） 「ハシドイ」（やち樺）の木を用いる。 H.　イモシカムイ（Imosh-kamui） 蓬の茎にて肢体及刀槍全部を作る。頭，体，上肢，下肢の六部に心臓（サンペ）を入れる。 この神は取扱いは最も鄭重にし必ず「イナウソ」と云う苫の敷物の上にて作り且つ安置する。		
			勧請する神，ニスクカムイ		
二−38			No.35	蛇神	キナペン・カムイ
			「ヌサコルカムイ」より勧請して貰う。「ヌサコルカムイ」の妻と云われている。婦女子の守護神として，特に身体虚弱或は病弱な者に与えられる。この神の守護により病気が治つても「イム」（Imu 一種の精神病）「ツスメノコ」（Tusu 巫女）などになると考えられている。 Kinapen-kamui.　A snake effigy.		
二−39	13		No.36	足高蜘蛛の神	アミタンネマツ
			難産の時に勧請する神である。難産の時には「ニスフチ」（臼の老女神）も大役をもつていただく。 Ami-tanne-mat.　An effigy of father-long-legs.		
二−40	14		No.37	屋敷の守護神について	ミンタル・コル・カムイ・イノンノイタク
			天地創造の昔，最も悪い神があつた。どんな刀を用ひても不死身で，切口はすぐ癒著してしまい，身体を切り断つ事が出来ない。世界中の人々も神々も困惑していた。「アイオイナカムイ」は弓弦に松脂を塗り固めた弦をもつて，その悪神（註，大蛇の頭）と戦つたが，その悪神は自分の不死身を信じて居たが，弦の武器で切られた傷は再び癒著出来なかつた。彼は「生物の居ない熱地獄に落とされることのない様」哀願して地上に留まることを得た。「アイオイカムイ」は人々に教えて，凡ての悪を掃き溜める場所として彼を約束した。その故に悪魔が人々に危害を及ぼす時には，この神に特に祈願をする方法が残されて居るのである。 写真は悪神に対し祈りを捧げて居るところである。 Mintar-kor-kamui-inonnoitak.　Asking help from the demon of the yard in front of the ainu hut. (註)「サクソモアエプ」(龍蛇) 或は「カンナカムイ」イキリ (「雷神」の系統) ではないか？　と云われて居る。		

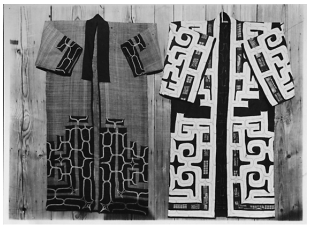
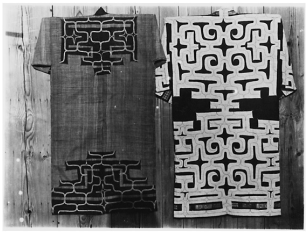
二−41			No.38　木の神々に祈る　チクニウエポタラ 病人のあるとき，その病を木の神がとり去つて呉れる様に祈る。尚，木の神から（「クスリエハロプカル」即ち木皮，果穀，樹液，樹脂）薬を恵まれる様の願いも併せて行う。 Chikuni-uwepotara.　Asking the tree spirits to cure diseases.
			水の神に祈る。　ワツカウシカムイ・ウエポタラ 水の神の祭壇（ワツカウシカムイ）に祈る。 「ワツカウシカムイヌサ」と手草を用意して行う。この祈りは狂人に対する祈りであつて，狂人にになる原因は「リクンカント」（上層の天国）の「ススランペツ」（ススラン川）のほとりに住む神が下界の人に思いをよせた時その人は狂人になる。―その神々のいたずらだと信じられる。 水の神の輩下の三人の神達にも祈りを捧げて，その神々の力添えを得て　狂人から天の魔神が去るように祈るのである。尚，天の川のほとりに虎杖（「クツタル」Kuttar）が此の地上の草と共通した植物故，「イタドリ」を以て小さい家を造り，祈りが全部終わり，狂人を手草（タクサ）を以て打ち浄め（カシキク）が終つて，全裸のままその家の内に入れられて火を放つ。家燃えて虎杖は爆竹の音を立てる。この音に憑き神である魔神が驚きて昇天する……と信じられて居る。 Wakka-us-kamui-uwepotara.　Asking the gods of rivers to cure mental disorder.
二−42	15		No.39　祭壇に祈る 刀を架けたるは主祭神で他の三神は水中。
二−43			No.40　祭壇全景 手前川の上流水中に木幣，四本一組，三組水中 向つて左流水の上流 ― 中流 ― 下流 ペヌツカオツクル（♂）　チウラリクル（♂）　パヌツカウンクル（♂） ペヌツカオツマツ（♀）　チウラリマツ（♀）　パヌツカウンマツ（♀）
			厠神に祈る。　アシンル・ウエポタラ 女子と男子は必ず厠を異にする。女子の不浄は悪魔もこれを避けると考えられて居る。 厠の位置は住家の西方道路を越して 10 m乃至 20 mの所で，厠に向つて左方は男子，右方は女子の厠，昔は通常この厠の後方 50 m乃至 100 mのところに墓所を作る。 Ashinru-uwepotara.　Saying prayers to the god of water-closet.
二−44	16		No.41　勧請（「ニスク」Nisuk）した神に祈る。

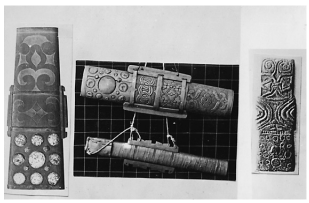
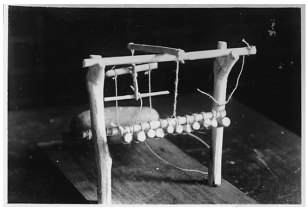
二−45			No.42	祈りを終わり患う者を手草(Takusa)を以て打ち浄める。	
二−46	17		No.43	海鳥の神	イソカピウ・カムイ，チカプ・カムイ・サパ
			悪疫より人々を護る神。即ち沙流川（大昔は現今の沙流川流域を「シシリムカ」と云つた）下流に棲む「フリ」と云う大鳥が居た。或時「メノコ」を一人引攫つた為に棲む岩室の穴上より鹿皮を垂れておびき出され攻撃された。そのために，ここに居られなくなり，何処となく飛び去つた。その時に現在の鵡川の上空を「ムカ」「ムカ」と呼び乍ら飛んだという。その後鵡川付近を「ムカ」と呼び，「シシリムカ」を「サル」と呼び改める様になつた。この沙流川口の海浜近くの部落に「キナコイペ」と云う人が住んで居たが，狩か所用かのため他出しての帰途に部落の様子が変な為に掟通り（昔は必ずこの事が守られた。それは悪疫，戦争等のため部落が全滅して居る場合があつたから……）磯辺に仮屋（カシコツ）を急造して泊まることにした際に，磯に打ち上げられた「イソカピユウ」（阿房鳥）の屍体を何気なく手にさげて来て仮家の入口に置いた。万感交々部落の安否を気遣い乍らとろとろと眠るともなくまどろんだ時に，矢叫びの音高く激しく家に当る音に目醒めて見ると，今日磯辺で拾つて入口に置いた筈の「イソカピユウ」が翼の羽音も高く，雨と降り来る征矢を打拂う勇しい有様を見た。家外では夥しい人声がして「あの鳥のために家の内の人を撃ち取る事の出来ないのは残念である。それにあの香りは「チクペニ」（槐樹）の香りと同じ嫌な香りだ…。」と。この魔神（パコル・カムイ）は天然痘の神であつた事を知つた。「キナコイペ」氏はこの事を人々に伝え，普通の病気，或は流行病の際も現存の老人達が，この神に祈り，且つその嘴を削つて薬を頂くと称して服用し，全快を祈るのである。尚，「パコル・カムイ」或は「パウチ・カムイ」又は「パヨカ・カムイ」と呼ばれる疫病神が「ユウクコイキ」（狩する，即ち対象は人）した際，妹神が人々の「スルクカル」（毒に当てられ）して苦しむのを見るにしのびずして金扇を持つて「アイエタエ」して兄神達の狩を妨害したので，兄神達は妹神を黒犬の姿にして「アイヌ」の村に住みつかせた……この故により村に「オリパク」（悪疫流行）のある際は黒犬は「モコレ」しない習慣がある。 Iso-kapiu-kamui.　The skull of a sea bird which Ainu worship greatly. （註）「アイエタエ」とは矢を抜く意，「モコレ」は眠らせる，即ち安楽死させる意。		
二−47			No.44	狐の神	チロンヌツプ・カムイ或はシヅムペ・カムイ
			夫々に性質の異つた神様があり，一般に神々の間に於て上位の神々は「ラムパセ」（鈍重で落書き）であり，急ぎの際間に合わない時もあるけれども，下位の神々は「ラムコシネ」（軽卒・気軽）な性質故に，早速に間に合うが，猪突猛進分別がない為間違いを起す場合がある。アイヌの間では形成的に「コシネ・カムイ」を上位（「キャンネレ」）にすえて機嫌を取る様にする。気さくな神程，短気でお天気であるが，私と気が合うと，安心し狎れて，非常に便利な神であるが，私の家を飽きると私に夢など見せて呉れないばかりか，容易ならん事をしでかす事もある。私がふとしたことで傷ついたり，家内達が患つたり，死んだり……。そして占（tusu）つて戴いて，初めてそれが知れたりする。この時はこの神が誰の所に行き度いのか，或は天なる神の下に昇りたいのかによつて処置されなければならない。一個人の守護神である。これらの外，他人には秘密で色々の神を個人の守護神として秘蔵する風習がある。「マンブリコル」「チコシンニニツプ」と称する。 この狐の脳漿を取り出した代りに尾毛の尖端の白尾を花木幣と共に入れる。 Chironnup-kamui.　Fox god. Shitumupe-kamui.		
二−48	18		No.45	住家	チセ
			（北海道沙流郡平賀村）　1920年 葦，野萱を材料として葺く。外側も同じ材を用いて，乾いた山葡萄の内皮を以て編み束ねる。入口は一つで，小屋を「セム」（sem）と云い，薪小屋，精穀物置等に使用する。正面は南に向くように建て，窓は南に一乃至二，東に一つ。東の窓は神聖な窓で神の出入口と信ぜられている。土間に萱を敷き，その上に苫を敷く。 Chise.　A house.		

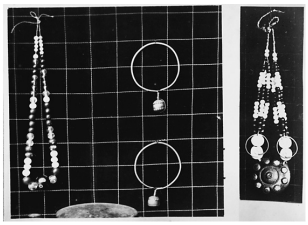
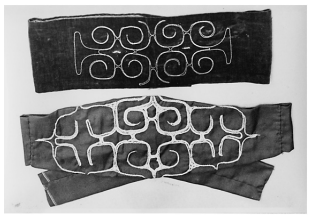
			部落・コタン 住家二戸以上の集団した所を「コタン」と云い習わしている。 Kotan.　A village.		
二−49	19		No.46	1920年　日高国門別村字新平賀村の風景	
			足高き家は食物庫「オツマムシ・プ」(O-tumam-us-pu) 或は「ケマウシプ」(Kema-us-pu) と云う。		
二−50			No.47	1932年　日高国平取村字ペナコリの風景	
二−51	20		No.48	発火器具	アエイキサプ 或いは ピウチ
			発火鉄と石とを打ち火花を出し，炭末に着火せしめ，アカダモの根の乾燥せるもの（拇指大）に更に火を移し，樺皮に点火する。このアカダモの根は空気がこの繊維の中を通るため空気を吸う様にして着火させる。道具を入れる袋を「カロプ」(Karop) と云い熊の皮にて作る，熊の皮は履物には絶対にしない。 左方……発火器具，　右方　発火風景。 Aeikisap, Piuchi.　Tools for making fire.		
二−52			No.49	男子老人	エカシ
			正面日常の服装で杖（kuwa）を持つ。 Ekashi.　An old man.		
二−53			No.50	男子老人背面	
			帯（kut）をしめ，左腰に小刀を帯用し，小細工皮剥ぎその他護身の為に使う。 Ekashi.　An old man（back-view）.		
二−54	21		No.51	薪負い	ニ・シケ
			荷物は荷縄にて結束して，荷縄の幅広き部分が額に当たるようにして負う。 危急の場合，ただちに身軽くなれる利便の為必ず写真のような荷の負い方をする。 Ni-shike.　An old woman carrying fire-wood on her back.		

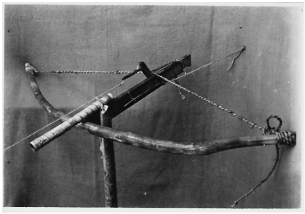
二−55			No.52	老婦人の子守り	パツカイ
			Pakkai.　An old woman carrying a baby on her back.		
二−56			No.53	模様入負縄	エムサトスケタル
			写真の負縄は子守りの為（写真 52）のものにして棒が子供の臀部に当たるようにする。 棒を「イヨマプ」と云い，「エムサトスケ」とは縄の模様の呼称である。棒を除けば普通の荷縄となる。 Pakkai-tar.　A sling used for carrying a child on the back.		
二−57	22		No.54	踊り	ホリツパ
			写真の如く，或は円形の輪を作り，男子を交えて女子は手を打ち乍ら左方へ半歩づつ側進し，男子は左手を以て胸を打ちつつ右手を前方に伸し，或は屈し，婦人は「ホイホイ」と男子は「ホホーイホイ」と囃しつつ，屋内ならば，炉を中心とし又は炉の上座の方で踊る。男子は右手に刀を持つ場合もある。 Horippa.　Dancing.		
二−58			No.55	舞踊	ハーラルキ
			鳥（雁・白鳥）の声と，飛ぶ様に似せて舞う。 縦列或は二横列となりて踊る。数人より数十人にて踊る。 Hararki.　Women dancing a dance called “hararki”.		
二−59			無		
二−60	23		No.56	手下げ袋	ラツサラニツプ
			しな樹の樹皮の水に晒さないものを以て底を正方形にして造る。 Isaroikip.　A large basket.		

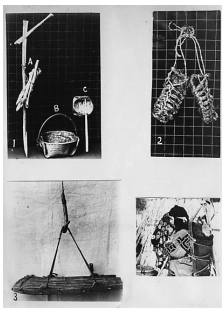
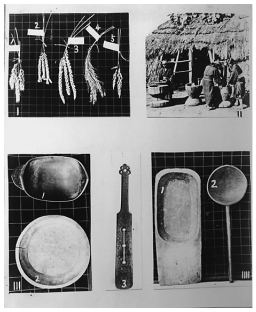
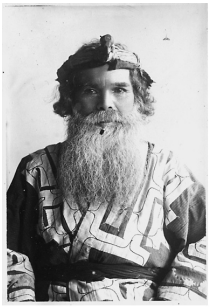
二−61			No.57	編袋	オンニペシサラニツプ
			大なるを「イサロイキプ」小なるを「ポンサラニプ」と云う。 「イサロイキプ」は穀物の穂ちぎり等，容積の大なるものを入れて背負う時に使用する。垂れて居る紐は物を入れ，口かがりに使い，荷縄を縁かがりに縛つて額に当てて背負う。「サラニプ」は物を入れ肩より下げて使用する。 Saranip.　A basket.		
二−62	24		No.58	苫編み	イテセ
			がまの葉を九月中旬に採取乾燥して作る。無地のものは，敷物及び寝具（蒲団代わり）として用い，模様編みは儀式の際の壁飾り及び祈祷の際の敷物として使用する。 Itese.　Making mats.		
二−63			No.59	模様入苫	ニカプ・ウン・トマ
			模様はしな樹，にれ等の皮を泥土に埋めて着色して使用する。赤色，黒色，黒褐色等で一枚の苫全部に模様の入りたるは儀式の際壁飾り及び敷物とする。 Nikap-un-toma.　A sedge mat ornamented with strips of bark.		
二−64			No.60	聖なる花莚	イナウ・ソ
			中央より半面のみ模様の入りたる苫にて，新酒を醸造して行う儀式の際，祭主及び主賓（炉の北側）に敷かれる。通常この敷物を敷いてからでなければ，神に祝，祈，等の詞を捧げないことになつている。神聖な祈りの場である。また特に軍神（imosikamui）の敷物とする（模様なき方上座）。 Inau-so.　A small sedge mat ornamented half-way with strips of bark.		
二−65	25		No.61	はた織り器具	イシタイキ・チエイワンケプ
			1)「クツペラ」…… 腰あて曲木（桑樹等を削つて使う） 2)「オプサカエ」…… 緯として使用する糸巻き 3)「オプカ」…… 普通の緯 4)「イキシマプ」…… 織物巻取棒 5)「アツヅシカルペラ」…… 織篦 6)「ペカウンペ」又は「カマカプ」…… 織糸の上と下を分ける器具 7)「ペカカリプ」…… 縦糸を上下に交叉する時に使う。細き糸を纏い縦糸を一本置きに通して使用する。 8)「ウオサ」…… 糸通し器具で糸の互に纏絡しない様にし織物の幅を定める。 Ishitaiki-chieiwankep.　Tools for weaving.		

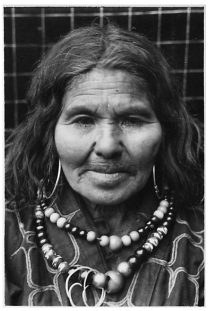
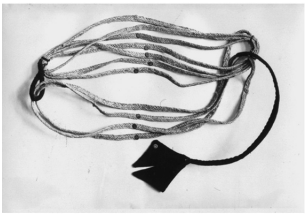
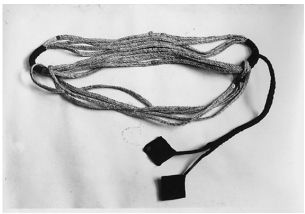
二−66			No.62・63	はた織風景	イシタイキ
			巾約 39 cm，糸数 250 本位迄 織進度は一日 3 m乃至 4 m，織維はおひょう楡・春楡・しな等の樹皮を水にさらし泥土で染めて使用する。 Attush.　A kind of cloth made fron the inner bark of elm-trees. Ishitaiki.　Weaving cloth.		
二−67					
二−68	26		No.64	衣服（礼服二種）正面	
			左方　チカルカル……刺繍を施した「アツシ」地着物 右方　カパラアミプ……木綿地に白布にて模様をかたどり簡単な刺繍をなす。襟・裾・袖口に青，赤等の別布を配する。 Two kinds of ceremonial clothes. Chikarkar.　(left) Kapar-amip.　(right)		
二−69			No.65	同上，　背面	
			The same.　(back)		
	27		飾用矢筒と大刀・宝刀，　イカヨプ・イコル　エムシ・イコロ 矢筒には使用済の動物体内より取り出した矢じりを入れて，屋内飾壇の壁に掛けて飾る。 「イカヨプ」は矢筒「イコル」は宝物の意で，通常「イコル」は飾刀の意味であつたが，物々交換不円滑の際，この「イコル」をあるものの代りとして使用し，貨幣の代りとした。後代，総てこれ等に代つて使用出来るものを総称して「イコル」と云つている。現今の鋳貨，紙幣も勿論「イコル」である。江戸末期は飾刀，鍔，漆器等が物々交換のために製作されたが骨董的価値は低かつた。 アイヌは古きもの又は美術的価値を知つて居たのか，当時その流通に価値の高かつたものは，現今に於ても重要なる美術的価値があり，その初代の所有者の名を冠して呼ぶ「イコル」が多数ある。しかしこれらの多くのものは時代の推移と共に，次第に美術蒐集家，ブローカーの手に渡り現存するものは少ない。 写真は近代のものである。 Ikayop-ikor. Emushi-ikor.　Quivers and swords		

二−70			No.66	「イカヨプ・イコル」(A. B. C. 三種)	
			「イカヨプ」　狩猟用の矢筒 Ikayop-ikor.　Three kinds (A. B. C.) of quivers.		
二−71			No.67	大刀(上)と宝刀(下)	「エムシ」・「イコル」
			Emushi and Ikor.　Swords.		
二−72	28		No.68	落罠	イテエプ
			狐，いたち，貂等小動物の捕獲用罠 Iteyep.　A kind of snare for catching small animals.		
二−73			No.69	海洋船	レパ・チプ
			遠洋に出漁する時に使用する船 Repa-chip.　A fishing boat.		
二−74			No.70	鳥罠	カ・アリ
			鷹，梟，鷲，鳥等鳥捕獲用に使用 Ka-ari.　A kind of anare for catching birds.		

<table>
<tr><td rowspan="2">二−75</td><td rowspan="2">29</td><td rowspan="2"> </td><td>No.71 床の間の宝物</td></tr>
<tr><td>Treasure corner in the house where lacquer wares are treasured.
<table>
<tr><td>A 「イヨイキリ」（宝物の陳列）
Iyoikir</td><td>キケウシパスイ （削掛附酒）
Kike-ush-pasui</td></tr>
<tr><td>B 「ケマ・ウシ・シントコ」・「ケマウシペ」及び「アニ・プンタリ」
Kema-ush-shintoko
and ani-puntari</td><td>C 「トコムシエチユシ」
Tokom-ush-echiushi
「エチユシ」
Echiushi</td></tr>
<tr><td>D 「プタウンパツチ」
Puta-un-patchi</td><td>E 「オツチケ」 「ツキ」 「イクパスイ」
（膳） （酒杯高つき） （酒箸）
Otchike Tuki Iku-pasui</td></tr>
</table></td></tr>
<tr><td>二−76</td><td></td><td>  </td><td>No.72 首飾玉，耳飾輪，三連首飾玉
<table>
<tr><td>首飾
「タマサイ」
Tama-sai；jewels</td><td>耳飾輪
「ニンカリ」
Ninkari；earrings
「エチユシ」
Echiushi；a bowl with a spout.</td><td>三連首飾玉
「レアツ・エリキン・シトキ」
Re-at-e-rikin-shitoki</td></tr>
</table></td></tr>
<tr><td>二−77</td><td rowspan="3">30</td><td> </td><td>No.73 冠 サパウンペ
儀式の際の男子用冠
Sapa-un-pe. Man’s ceremonial head-wear.</td></tr>
<tr><td>二−78</td><td>  </td><td>No.74 鉢巻帽子 マタンプシ
儀式用女子鉢巻帽
Matampushi. Woman’s ceremonial head-wear.</td></tr>
<tr><td>二−79</td><td> </td><td>No.75 頭巾 コンチ
子供頭巾
Konchi. Child’s hood.</td></tr>
</table>

二−80	31		No.76	山刀と小刀	タシロとマキリ
			Knives. 左　　山　刀　「タシロ」 右　　小　刀　「アリペクンネ」又は「マキリ」		
二−81			No.77	仕掛け弓	クアリ
			「ク」……弓 「アリ」……据え置く Kuari.　　A spring-bow.		
二−82			No.78	丸木舟	チツプ
			この舟は斧にてくり抜き火にて凹凸を焼きて滑らかにする。 木材は桂，やちだも等である。 舟……「チツプ」(Chip) 竿……「ツリ」(turi) かい……「アツサプ」(assap) Chip.　　A boat.		
二−83	32		No.79	精穀	イユタ
			臼……「ニ　ス」(Nisu) 杵……「イユタニ」(Iyuta-ni) 一人乃至三人にて搗く。調子を合わせる為に唄う。これを「イユタウポポ」と云う。 Iyuta.　　Pounding.		
二−84			No.80		
			1)　箕……「ムイ」又は「イソイソエプ」 Mui.　　A winnow. 2)　酒　槽……「サカエナンテプ」(單に「サカエ」) 3)　椀……「イタンキ」 Itanki.　　A wooden cup.		
二−85			No.81	水力穀搗	
			「ソルイイユタプ」又は「イユタプ」或は「バツタリ」 杵と水槽の中間に支點を設け水槽に水満つれば，重心水槽に移つて下降する。水槽より水落ちて復元する際に，杵は臼をつく。 Sor-iyutap.　　A kind od water-mill.		

二−86	33		No.82 (1) A. B. C. 燈火「スネ」 手 桶 柄杓「ピサツク」 「ニアツシ」樺の皮にて作る A torch. A handing tub. A ladle. (2) わらじ「スツケリ」 山葡萄の皮にて作るのを最上とす。 冬は「ケリ」(鹿・鮭皮の靴)を穿く, 中に枯草を敷く。 Shitukeri. Sandales. (3) 搖 槌 「シンタ」 槌に鬼茅を編みたるすだれを敷き,子を これに結縛して家の梁より下げて搖る。 Shinta. A cradle. (4) 子 守 「パツカイ」 子守唄を唄う。 この唄を「イヨンノツカ」と云う。 Tending a baby.
二−87			No.83 (I) 穀物「アマム」 Amam;millet. (1)「ピヤパ」…… 改良稗 (2)「エペツケムンチロ」…… 六角あわ (3)「プシタンネムンチロ」…… 穂長あわ (4)「シプシケプ」…… 稻 黍 (5)「ピヤパ」…… 稗 (II) 穀 搗 「イ ユ タ」 Iyuta. Pounding. (III) 1.「ニ マ」 2.「ニ マ」 3.「シトペラ」 (IIII) 1.「イタタプニマ」 2.「カシユプ」
二−88	34		No.84 男子老人 エカシ Ekashi. An old man.
二−89			No.85 男子老人 Same as above.
二−90			No.86 女子老人 フチ Huchi. An old woman.

<table>
<tr><td>二−91</td><td></td><td>  </td><td>No.87　女子老人
Same as above.</td></tr>
<tr><td>二−92</td><td rowspan="2">35</td><td>  </td><td rowspan="2">No.88　祖母の秘め帯，「ポンク」又は「ラウンク」或は「ウプソロク」
「アツ・ニ」樹皮（おひょう楡）或は「ハイ」（つるうめもどき），「ハイキナ」（いらくさ）等の柔軟なる繊維を使用する。長さ，本数，尖端の黒布，纏方等まちまちである。女子が嫁ぐ前，曾祖母，祖母或は母がこの帯とその作り方とを教えて「これは神様が祖母達に伝えたもので，代々女系の子孫に伝えなければならない。この帯を身につけることにより諸々の災厄より救われ，夫と子孫達が限りない幸福を得られる。決して夫及び他の何人にも見せる事は出来ない。そして，余りこれが損ぜられないうちに新しいのと取り換え，古いものは女子厠の邊に目立たぬ様仕末せよ……」と。男子が殊更に女子の不浄を忌むのは，狩に関連するが，これを言葉にする事は勿論，連想する様な事も禁忌される。女子には幸福の帯も，男子にはこれを口にする事すら「禁忌」とされ，況んや，これに触れ，又は視る事は重大な「禁忌」を犯すものとして，万一その禁を破つてこれを見，或は触れた場合は，特に浄めてからでなければ，狩猟などの行動は許されない―，とされていた。
現今は最早や，その製作方法及び身に纏う事も，特殊な婦人に限られ秘め帯びの風習は絶滅の寸前にある。
これはアイヌの風習が行われなくなりつつある為である。
Ponkut.　Secret cord tied round the loins of woman.</td></tr>
<tr><td>二−93</td><td>  </td></tr>
<tr><td>二−94</td><td rowspan="2">36</td><td> </td><td rowspan="2">No.89・90　口周入墨　パキサルカル，ポロシヌエ
アイヌの乳呑子（teinep）の時耳に穴を穿ち，處女初潮当時「ポンパキサルカル」と称して，上下唇に一指幅程の入墨を入れ，結婚前通常のものとする。刀尖，剃刀等にて皮膚を切截し，樹皮の油煙を鍋のしりに燻採し，これを塗擦して着色し，アオダモ（iwani）　ヤチダモ（pinni）　榛樹（kene）の皮の浸出液にて洗う。
Pakisar-kar.　A woman tattooed round her mouth.</td></tr>
<tr><td>二−95</td><td> </td></tr>
</table>

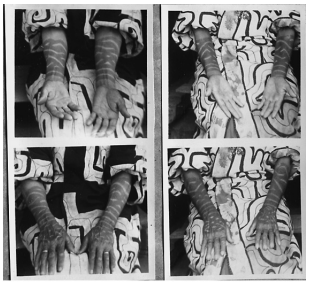
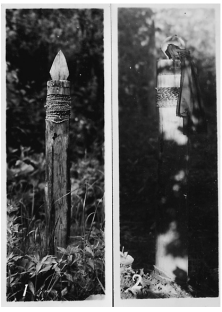
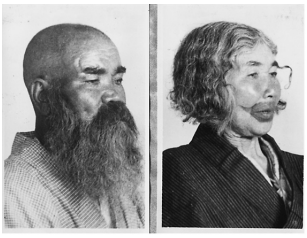
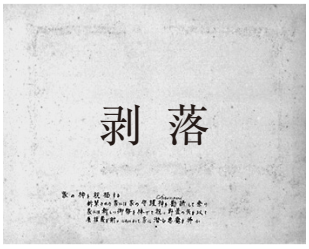
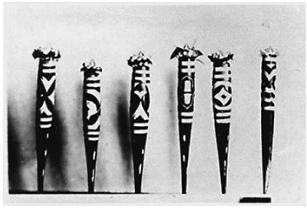
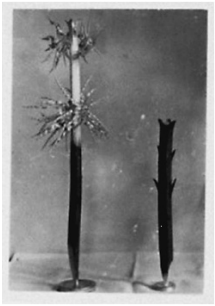
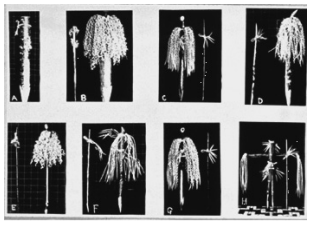
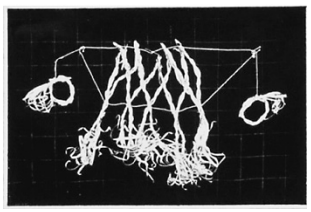
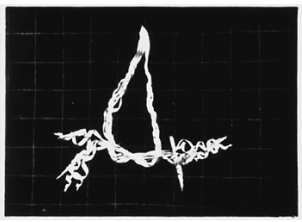
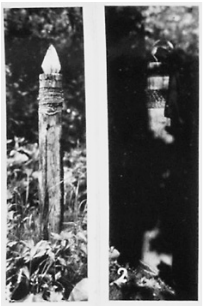
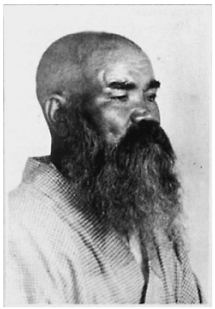
二−96			No.91・92	腕入墨	テケシヌエ
			環と鍵型交叉，即ち「テツクツ」と「ウオルン」の模様を配合して作る。結婚後この手術が行われる。 Teke-shinuye.　Tattooing on the fore arms. 総ての入墨は，人類始祖である神「オキクルミ」及び其の妻より教えられた事で，この事により人の子にも神にも愛されると伝えられ，Ponkut, Kuwa　と共に死後祖先のもとへ行く手形と考えて居る。		
二−97					
			墓　標　　ク　ワ アイヌの墓標の価値は死者の埋葬場所を明示するためばかりでない。 これは祖先の處に行くための一つの手形と考えられ，女子はこの前に母系伝来の秘め帯と共に死後の手形と云われ，如何に立派な引導を戴いても，これがなければ，祖先の處へは行けない事になつて居る。 「クワ」とは杖の意。「キムンクワ」は山杖，即ち狩の際の杖等。 Kuwa.　Grave posts.		
二−98			No.93	1)　男子特殊なるもの　The grave of the chief of a tribe. 第16代亡「イタキトカアイヌ」の墓標，1945年。 沙流（サル）平取の酋長は一代交互に，この「三叉」の墓標を，その墓に立てなければならない慣習であるが，如何なる根據によつて，かような墓標になつたかは不明。この先々代は，木の「二叉」に槍の穂先を片方に刺して三叉として立てた。現酋長の家の北西約100 m畑地内に埋葬された。 2)　二風谷酋長の墓標		
二−99	37		No.94	1)男子墓標　Grave post of man. 埋葬の祭男子は頭部の左側に立てる。 2）女子の墓標　Grave post of woman. 埋葬の際，頭部の右側に立て，再建することはない。 埋葬の際，水を入れない桶を墓標の上より打ち，底，蓋を一気に打ち抜き，濡れたる黒土を手に，墓標をなで乍ら哀泣する。	
二−100			無		

表2　国立歴史民俗博物館所蔵の写真帳解説内容

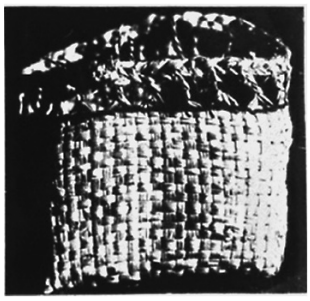
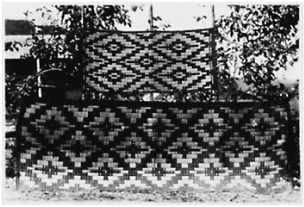
No.	写　　真	キャプション（日本語・アイヌ語）及び解説内容
歴－1		想いで
歴－2		家の神を祝福する Chisunomi 新築された家には家の守護神を勸請して祭り 家には新しい御幣を捧げて祝い野萱の矢を以て 屋根裏を射ゝこれによって家に潜む悪魔を拂ふ
歴－3		仔熊の家　Kezer chu.
歴－4		祭壇の祈り　Kamu nomi 熊祭りの前祈り　左方のうずくまる老人は 特に熊の王神に祈りをする
歴－5		仔熊を遊ばせ走らす　iwarte
歴－6		仔熊に矢を捧げる　Kepor ai uhu

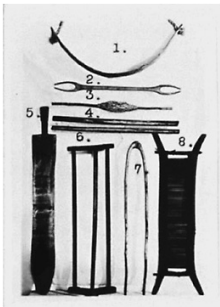
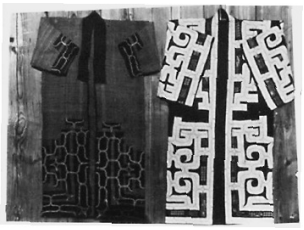
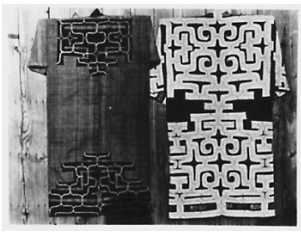
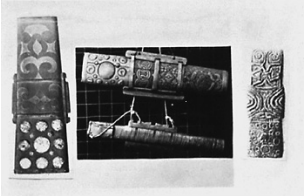
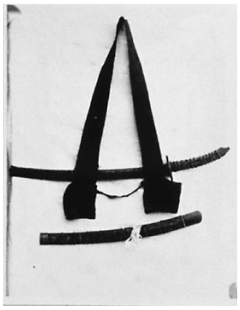
歴－7		上図　花矢　Sirori ai 雌と雄によって花の数を異なる
歴－8		右上図　花矢を射る　Sirori ak 特に選ばれた長老、青年達が熊の好む花矢を与える これらの儀式のうちにすでに忘れられた数々の（今ぞ） を秘めてある
歴－9		右下図　仔熊の血を頂ける　Kururu chapkan 現今では体の弱いもの或は尚以上に視健に当たり人が 主祭に選ばれ出てこの儀式につらなることが出来る この儀式と其の他一二三の儀式は熊祭りがトーテム社会 に関連をもつと思はれる　ぎしくと解く鍵があることを思は せる
歴－10		仔熊のお化粧　imemuke 屠られた熊は屋内の祝福を終えて髪を整えられ東窓から たくさんの御幣で飾られて祭壇の狩の神（hari makamui） の一族である大王熊神（metotusi kamui）の処に頭蓋掛木一 （yukusapa un ni）に飾られて霊送りの式（kegomante） を終えて黎明を迎える
歴－11		式后の祭壇　imanchipa

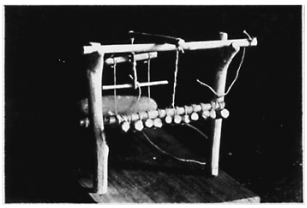
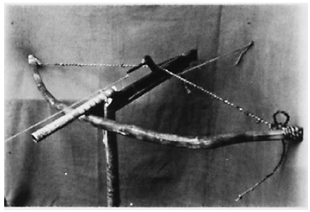
歴－12		威嚇踏舞行進 住家の火事　変死人など不測の災害の際　善神を慰め或は激励して悪神 悪魔を威嚇退散せしめるために Rorunpu nuwenap kusi 行われる踏舞行進で変事のあった場所に祭壇を設けその前に各部落から集合した人々は酋長或は長老を先頭に一定の形式に 従って前進 旋回する　昔は老頭の人が棒幣を持った事もあった　この踏舞から群舞などの踊を発生したのである この図は昭和12年夏婦人が水死した際（Rorunpu nuwenap kusi　）行われたものでこの婦人はイムイ（imin の意味で某日本青年が（とばない）と云ふため反對運動をして沙流川に飛込んで死んだ　泳守りの老婦人である
歴－13		棒　幣 左　chehor kake 右　nitne inan 悪魔を威嚇するための武器の棍棒が後にこの悪魔の ご氣嫌をとるために棒幣として（右）のこれを棒が鋭利な 鉄器が使用されるようになると（左）の（chehorokakep　） を作り現在用いられる壮大な木幣も作られるようになった
歴－14		枝のある棒幣とけずりかけの幣　hari nam 狩猟用の山杖（kimunkniua　）は握りの処に 枝のある木を使ふこの棍棒（kuman in　）おり 発展した御幣では今からうか
歴－15		勸請される神　cinu kekemishk A. B. 家の守護神はしどいの木の神 punkau-kamui C. 櫨樹（えんじゅう）の神 chikapeni kamui D. 棘のある木の神 ayusi ni kamui E. 門口神 abasukur-kamui F. 屋敷神 mintorkor kamui　この木は G. 桑骨木を使を使ふ（sokoni yaruyeni　）は神様に 登録されていない奥積の木で不浄な処に使用される個人の 守護神 kunkiru kamui H. 蓬の神 imori kamui
歴－16		蛇　神　kinasutuk kamui 病氣の際の護り神で 平癒後巫女 tusu menoka になることが多い

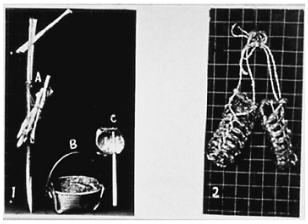
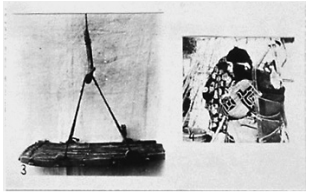
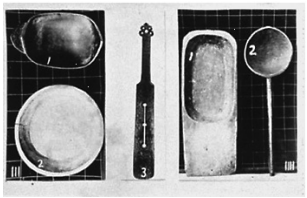
歴－17		熊祭りのときの 仔熊の晴着の御幣 左、右の輪は耳飾りの耳輪を 象る
歴－18		新酒を醸したとき又は巫女が神がかり に入る前に手えられる　又 家の神々に祭壇の棒幣の口に刺し 神に捧げられる
歴－19		左、男 } 墓　標 { kuwa 右、女 } asini 先の尖ったのが男のもの　先円く黒布の通してあるのが女　えんじゅうの木で作りこれも勸請する 神で国土の神(Sirunpa kamui)の草下のえんじゅ神(kikupeni kamui)が死 者が冥府の村父祖達の処まで無事に道中出来る様　この神と水の神の助力を得る様 に火の神に御願いするのである 黒い布は死者の後を慕って暗く人々の流す涙と鼻汁は濃霧となって彼方を閉すので 死者は後をふり返えれども現世は何も見ることが出来ない　若し悪魔が道中誘惑したならこの神 のもつ縄(墓標に巻いてある)が手草の代りになり悪魔を追い神ふ役を持っている
歴－20		沙流の大酋長　夫妻 フモシルン王から 第16代目 イタキトカアイヌ（夫） うすらん　（婦）
歴－21		沙流の大酋長　夫妻 フモシルン王から 第16代目 イタキトカアイヌ（夫） うすらん　（婦）

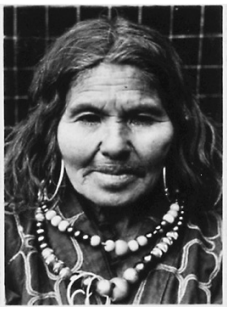
歴－22		住　家 玄関口の小屋は薪小屋 物置を兼ねた出入口にも使っている chisi 水屋の小窓は流場の小窓 大きな窓は昔はこゝに出入口を設けてこの出入口から仔熊の檻が見え仔熊の食餌もこの処から出した仔熊を飼ふことが絶ってスゝ為 この出入口も不用になって単なる窓になって名残を止めてゐる 家の屋根も木の皮で葺いて名残りを遺して段々茅にしている
歴－23		部　落　kotäm. 足の高い家は穀物倉（ bu ）又は （kemauri bu）（oluma usu bu） と云ふ．大正末期新平賀コタンの景
歴－24		児もり　bakkai
歴－25		鳥の舞　kararuki
歴－26		輪　舞　karipa.
歴－27		大きな袋を編む ミな（福）の木の真皮を水に浸け さらしてやわらかになったものを編む 小さいものは底の方から編み家の 梁などから吊下げて手編みする

歴－28		A. 編み袋 Saraanp 大なる方 isarot hip と云ふ樹繩にて背に負ふ 小なる方 pon saraanp とてかたより下げるか手に持つ
歴－29		B 編み袋 nakisaranip 漂さない樺樹の皮にて組合せて 稍 四角の形に作る
歴－30		とま（苫）編み itesi がま（蒲）の葉にて作り模様入りのものは i全（樺）の木の皮を泥土全ど（沼の）にて着色して使用する
歴－31		模様入りの苫 nikapumpe nikapampe 小なるは儀式のとき上座に敷く 大なるは儀式のときの壁飾り用
歴－32		織物 isilaiki おひようだもの皮質の繊維、いらぐさの繊維を主として使ひる 現今では、i全（樺）の木が代用されている

歴－33		織物器具 isitaiki chiekankap.
歴－34		裝飾された着物 chikar kar
歴－35		左オはあひようだも（ atni ）で織られた 着物に刺繍をしたもの 右オは木綿織りの着物に白地の木綿を切り ぬいて模様を作り細く刺繍し赤青の布で 袖口、裾廻りに或は袂の周に裝飾をした 正面と背面
歴－36		矢筒と飾矢筒 中央正面下段のものが矢筒で裏樺の皮で作り 楊の皮にて巻いて補強し蓋と作る 中央上段と左右の三つは飾矢筒 ekayap ekar と云ふ 円形の金具と彫刻で飾る家中の寶物棚に下がり飾帳 用い終った矢の根を入れて置き物と交換其の他 刀鍛 汁器、曲玉などの次に寶物として用いられるが価値は彫 刻と使用された金属の種類によって判断される
歴－37		大刀と寶刀 omasi ekar 大刀の外裝はアイヌ自身の手になるも刀身の多くは 和前ものの銅の入り金り 金まくら 金がら 熊 などはこれで殺された 短刀の多くは 刀身のないものが多い 重要 美術品も相当ある

歴－38		押し落し　iteyep 小動物の捕獲に用ゆる
歴－39		鳥罠（とりかけ）　kaari
歴－40		海の船　Repa chip
歴－41		丸木舟　chip
歴－42		仕掛弓　kuari
歴－43		山刀と小刀　tosira makiri

歴－44		自働穀搗き iyutap 水槽と杵の中間に支点を設けて流水が 水槽を満すと水槽は下降して水は槽から 流れると杵は下降して臼に止まる
歴－45		穀搗き iyuta
歴－46		(1) A. 灯. Sune B. 桶. matari C. 柄杓. pishachu (2) 山ブドー蔓の皮の靴 Sutuker
歴－47		(3) 揺り船 Sinata 小児を載せて揺り籠り眠らせる虫の害 共の他 地上に はう ものの防ぎをうけ る 野では三脚を作って下げる家では梁から 下げる. 右オはこれを背ふた図
歴－48		汁器類 Ⅲ 1.2 木の鉢 nima 1. 樺太 2. 沙流地方 3. ペラ(貌) pera Ⅲ 1. まな板兼用鉢 ikarami nima 2 杓子 karup.
歴－49		箕. 柄付鉢. 片口鉢 mai anipuntar. ekurup

歴－50		老人、男子　ekari
歴－51		貴婦人　Kat kematu
歴－52		婦人の手の入墨
歴－53		婦人の手の入墨
歴－54		船の民くぐり遊び　eramu sinat 「サイトリ　サイナー　ミー サイナ サイトリ　サイナ　ニー サイナ」 と囃しながら民の中の食べものを親鳥は盗って 仔鳥に与える親鳥は国にのって盗をすると最後に 民にかいるーー　囃は日本語らしい 「剌島剌を見さい」 島巡の門づけの唄でないでせうか 文化の交流は相当古いのでないかと想像され ます

歴－55		しぎ（鴫）と雨燕の踊り Kyak. piyak. ckyak ctuyak
歴－56		老媼が鰊を見つける 鰊祭りの遊び　ufun-penera
歴－57		盲目の老媼が海により鰊のあることを察知して人々に知らせる 大勢の人はかけつけて初はこが欲しい私はこがと この鰊をかかついで運び去る室内に於ては酒興として 踊り伏している人々に鰊はされて戸外の雪の中に運ばれ笑わ 盲の老婦人の登場することは注目さるべきことがらと思はれる 巫女などの盲目者が多く選ばれるから これも昔の鰊祭り の折の重大儀式がこれ等形式にのみ見られる程 度に衰亡されているのでは無いかと考えられる
歴－58		降神の舞 kamin sento bueranto 対面の両列の婦人が踊りの始 寡婦の彼小姫まくりをして 「神が降りて来て お告げが出るぞ （　　」と歌い 互いに打ち合い最後に相手は相手を投げ倒す非常に勇 壮活潑な踊りで本来の踊りの意義は忘れられてゐるが 冒頭に（農の夜の大傷病を盗人をうう）と云ふことから考へられる 盗人の戒めで無いかと考えられている。いつのころにしても神白いの ノ才法で色々な事に使われたのでは無いかと想像される
歴－59		歳神の歌 kulunke upopo 疫病神を追いはらう歌
歴－60		親鳥　子鳥の舞 hantori hanichikup 親鳥が巣立ちする子鳥を見守り飛翔出来る ようになると親鳥、小鳥仲おく列を会して飛び去る この情景を舞踊化したものと伝える

歴－61		鳥の舞 annakere kararaki
歴－62		大阿呆鳥の舞 isakapiyn kararaki
歴－63		豊穣の祈り haruetoka horitpa 早春潜京神に豊作を祈願する舞踊をする 手に細き糸ともち この糸の長さ以上の高さの 穀物が捨るよう祈りながら踊る
歴－64		屋内の集い 或病人(右側に三人の婦人の中央 鉢巻なる婦人)の為め 巫女と呪師(左方 炉に薪を焚いてゐる老男子) が招かれて 神おろし をしてお呪(まじない) をして病気 yai mu wen を治す
歴－65		屋内祝宴
歴－66		結婚の室内風景 ukokunu ukohnu 左方の黒い着物を着た婦人が夫(一人おりて冠を被った男)と古式 の結婚式をする 嫁の親が新郎 新婦の間に座り 新郎の前の膳に山盛りの ご飯と酒杯があり 新郎がこれに箸をつけ 残りのご飯(Sanapi aruke)を新婦に与え杯も同様に 古代社会に於て或集団と食を共にすることは母の集団に仲間 入りすることを意味すこと は普通どの民族にも見られることで 現今でも 三々九度の盃をして 結婚の証しとしていること、大喜会一 この写真は 1984、12月時に古式を以て30年程 前に結婚をされた夫婦によって再現した

歴－67		下図は右方の男子は新郎の父親で　新婦の父親に對して 贈物を送ってゐる　　結納に代るもの 嫁を貰ふ意味のものであらう 嫁の親から所謂聟引出物としてその格式に応じて贈物(どりう)が 与えられる　これは時には同じ猟区内の仕掛弓の場所 熊宍　其の他　呪文等と種々のものが与えられる machiwai 結婚式の室内風景 養育料(結納)祝 urisipa iwai の授受 右方が新夫の父　　左方が新婦の父
歴－68		御挨拶（男） yakusekarpa.
歴－69		御挨拶（女）uiui suipa
歴－70		感謝する saimiki parakar
歴－71		慰め　amusa
歴－72		踏舞 tapuker 1955. 9. 13 於白老熊祭り

歴－73		刀舞 taprkar Enusitap kar
歴－74		屋敷神に祈る mintarkoikamui inonno itaku 屋敷神はもろもろの悪魔をこの神に与える約束で 屋敷神にされている間しこの祈りの言葉を話せる人も なくなった これは邪神と大部の人に考えられているから、 この祈りの言葉も秘密なものとして善良な人さえ知り てはならないとされていたためである 本来はシャーマン酋長だけが知るべきものであったものであろう
歴－75		木の神に祈る chekami repotara 柏の若木又は楢の若木などに病気の平 を祈る 木は国土神（Seri anba kamui ） の眷下でアイヌの神では火の神と水の神と含めて三大神 とも強すべき存在である この五本の柏木神には根のと 幹のと枝のと並れぞれ三ヶ所に神が存在しているので この三神に対し祈りの言葉を捧げて手厚く浄めて病気から悪魔 を打ち祓の叩き出すべく同この木の一部分を削ぎ取り服用して体内 悪魔を追い祓う手段とする Ku Suki ahop kar ） とり柏、えぞ柏、ぶんの木、たびの根の根、円皮、こぶこの皮を服用し しこうの木の黄色な皮を傷薬にするなど唯のから重用に意識して使用する
歴－76		水の神に祈る wakkausi komui repatare 悪魔を追い祓い疫を清める為に水の神の力を借り ことを願う 水で叩く（peka chika hik ）為に手草 を用意し力を与えて上瀬の神、中瀬の神、下瀬の神 の夫妻達に祈る 水の神の祈りは非常に広汎にわたって行われる
歴－77		厠の神に祈る 厠の神夫妻（sikunsari kurlekumarimat に病気を平 を祈願する。主として女子に行なう場合が多い

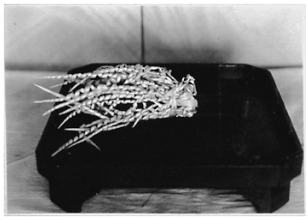
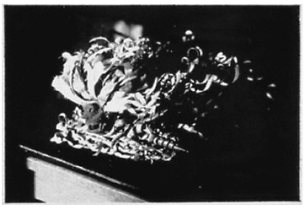
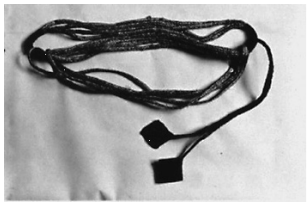
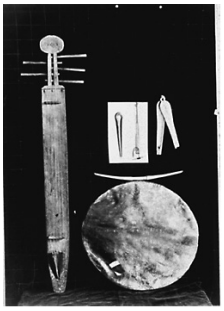
歴－78		大阿呆鳥の神 siratki kamui などともよばれ病気神に対して絶大な力を発揮する神で 普通の病気（頭痛、腹痛、風邪など）のときにもお願い すると 喘を削って服用すれば病気も治る 旅行などに行く時もお酒を捧げて道中の無事を祈る
歴－79		狐神 situnpe kamui 山の尾根に棲む神として尊敬されている神で 幽運をもたらすと考えられ又 吉、凶を知らせて 下さる神とも信じられている
歴－80		魔除の帯 pan-rut saan rut upusara rut chinironga rut 随分古くから婦人達が腰に巻いている長い毬母系の一 立派な母系だと傳えている 紐の細みすは薄と変化がないが 紐の長さ巾を幅になっている数が異なり、紐の先の布の形 状が異る この黒布は元来は独立した前垂れの様なもの（樺太の　　など）の一連の紐と合体したもので ないかと考えられる
歴－81	不掲載	この紐を結ぶことによって不浄（女は不浄なものと考え ている）が薄らぎ又悪魔がうもつのれることがない。 丈の猟運 幽運かよいと考え丈つかりの力になるものと 考へられる それは婦人がその腐している母系氏族 （seno uprui na manokoka atari ）のもつ力の 裏付であり神から（ai oinaka-mui kuresi ） これをいただいたときからもっている口先力とも考えている 草の繊維で作る（いら草 つるうめもどき）
歴－82		樂　器 左　たてこと ―――― 樺太 右上段白樺の中 {左、鉄で作った / 右、木又は骨で作った} 沙流 ムックリと容器 mul kuri 右下　太鼓とばち ―― 樺太 katcho sepni

表3　両写真帳の重複する写真

	二風谷写真帳	歴博写真帳	歴　博　ネ　ガ	歴博資料番号	ネ　ガ　の　状　況
1	二-2	歴-2(剥落)	ニトロセルロースフィルム 8.2×10.8 cm	F-387-2-5-76	オリジナル
2	二-3	歴-3	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F-387-2-11-5	オリジナルの可能性がある
3	二-8	歴-4	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F-387-2-11-4	オリジナルの可能性がある
4	二-10	歴-5	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F-387-2-11-13	オリジナル
5	二-12	歴-7	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F-387-2-12-196	複写
6	二-13	歴-6	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F-387-2-11-15	オリジナル
7	二-21	歴-9	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F-387-2-11-36	オリジナル
8	二-24	歴-10	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F-387-2-11-41	オリジナル
9	二-29	歴-11	ニトロセルロースフィルム 8.2×10.8 cm	F-387-2-14-181	オリジナル
10	二-30	歴-12	ガラス乾板　8.0×12.0 cm	F-387-2-10-64	複写の可能性がある
11	二-31	歴-13	ニトロセルロースフィルム 8.2×10.9 cm	F-387-2-2-176	オリジナル
12	二-34	歴-14	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F-387-2-2-153	オリジナル
13	二-36	歴-18	ガラス乾板　8.2×10.5 cm	F-387-2-14-189	オリジナル
14	二-37	歴-15	ガラス乾板　11.9×16.4 cm	F-387-2-14-377	複写
15	二-38	歴-16	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F-387-2-14-191	オリジナル
16	二-40	歴-74	ニトロセルロースフィルム 8×10.8 cm	F-387-2-7-74	オリジナル
17	二-41	歴-75	ニトロセルロースフィルム 8.2×10.7 cm	F-387-2-7-71	オリジナル
18	二-42	歴-76	ニトロセルロースフィルム 8.2×10.8 cm	F-387-2-7-66	オリジナル
19	二-44	歴-77	ニトロセルロースフィルム 8.2×10.8 cm	F-387-2-7-67	オリジナル
20	二-46	歴-78	ガラス乾板　11.9×16.4 cm	F-387-2-14-195	オリジナル
21	二-47	歴-79	ガラス乾板　8.1×11.9 cm	F-387-2-14-192	オリジナルの可能性がある
22	二-48	歴-22	ガラス乾板　11.9×16.4 cm	F-387-2-15-218	オリジナル
23	二-49	歴-23	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F-387-2-15-221	オリジナル
24	二-55	歴-24	ガラス乾板　8.0×10.8 cm	F-387-2-3-142	オリジナルの可能性がある
25	二-57	歴-26(剥落)	ガラス乾板　8.2×10.8 cm	F-387-2-8-105	オリジナル
26	二-58	歴-25	ガラス乾板　8.0×12.0 cm	F-387-2-8-99	複写
27	二-60	歴-29	ガラス乾板　11.9×16.4 cm	F-387-2-14-373	複写
28	二-61	歴-28			
29	二-62	歴-30	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F-387-2-3-128	オリジナル
30	二-63	歴-31	ガラス乾板　8.0×12.0 cm	F-387-2-3-134	オリジナル
31	二-65	歴-33	ガラス乾板　11.9×16.4 cm	F-387-2-3-366	複写
32	二-67	歴-32	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F-387-2-3-121	オリジナル
33	二-68	歴-34	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F-387-2-12-198	オリジナル
34	二-69	歴-35	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F-387-2-12-199	オリジナル
35	二-70	歴-36	ガラス乾板　11.9×16.4 cm	F-387-2-12-381	複写
36	二-71	歴-37	ガラス乾板　8.2×11.9 cm	F-387-2-12-205	オリジナル
37	二-72	歴-38	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F-387-2-12-208	オリジナル
38	二-73	歴-40	ガラス乾板　11.9×16.4 cm	F-387-2-12-217	オリジナル
39	二-74	歴-39	ガラス乾板　11.9×16.4 cm	F-387-2-12-209	オリジナル
40	二-80	歴-43	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F-387-2-12-213	オリジナル
41	二-81	歴-42	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F-387-2-12-207	オリジナル
42	二-82	歴-41	ガラス乾板　8.2×12.0 cm	F-387-2-3-144	オリジナル
43	二-83	歴-45	ガラス乾板　8.3×10.7 cm	F-387-2-3-137	複写の可能性がある
44	二-84	歴-49下段のみ	ガラス乾板　11.9×16.4 cm	F-387-2-12-385	複写
45	二-85	歴-44	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F-387-2-12-216	オリジナル
46	二-86	歴-46上段のみ	ガラス乾板　11.9×16.4 cm	F-387-2-12-383	複写
		歴-47下段のみ			
47	二-87	歴-48下段のみ	ガラス乾板　11.9×16.4 cm	F-387-2-12-384	複写
48	二-88	歴-50	ガラス乾板　8.1×10.7 cm	F-387-2-16-245	オリジナル
49	二-91	歴-51	ガラス乾板　8.1×10.7 cm	F-387-2-18-266	オリジナル
50	二-93	歴-80	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F-387-2-4-110	オリジナルの可能性がある
51	二-97	歴-52上段のみ	ガラス乾板　11.9×16.4 cm	F-387-2-17-327	オリジナル
		歴-53下段のみ	ガラス乾板　11.9×16.4 cm	F-387-2-17-326	オリジナル
52	二-99	歴-19	ガラス乾板　8.2×11.9 cm	F-387-2-9-118	オリジナル
53	二-100	歴-20男性	ガラス乾板　8.1×11.9 cm	F-387-2-16-255	複写
		歴-21女性	ガラス乾板　8.2×12.0 cm	F-387-2-17-302	複写

表4　二風谷写真帳にのみ見られる写真

No.	写真 No.	歴　博　ネ　ガ	歴博資料番号	ネガの状況	No.	写真 No.	歴　博　ネ　ガ	歴博資料番号	ネガの状況
1	二–4	ガラス乾板　8.1×10.7 cm	F–387–2–11–6	オリジナルの可能性	27	二–51	ガラス乾板　8.2×12.0 cm	F–387–2–3–369	複写
2	二–5	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F–387–2–11–7	オリジナル	28	二–52	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F–387–2–1–329	オリジナル
3	二–6	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F–387–2–11–8	オリジナル	29	二–53	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F–387–2–1–330	オリジナル
4	二–7	ガラス乾板　8.1×10.7 cm	F–387–2–11–10	オリジナル	30	二–54	ガラス乾板　8.2×10.8 cm	F–387–2–3–143	オリジナルの可能性
5	二–9	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F–387–2–11–3	オリジナルの可能性	31	二–56	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F–387–2–12–210	オリジナル
6	二–11	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F–387–2–11–14	オリジナル	32	二–59	ガラス乾板　8.0×12.0 cm	F–387–2–3–131	オリジナルの可能性
7	二–14	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F–387–2–11–17	オリジナル			ガラス乾板　8.2×12.0 cm	F–387–2–3–132	オリジナルの可能性
8	二–15	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F–387–2–11–16	オリジナル	33	二–64	ガラス乾板　8.0×12.0 cm	F–387–2–3–135	オリジナルの可能性
9	二–16	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F–387–2–11–21	オリジナル	34	二–66	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F–387–2–3–123	オリジナル
10	二–17	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F–387–2–11–27	オリジナル	35	二–75	ガラス乾板　11.9×16.4 cm	F–387–2–12–386	複写
11	二–18	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F–387–2–11–23	オリジナル	36	二–76	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F–387–2–12–206	オリジナル
12	二–19	ガラス乾板　8.1×10.7 cm	F–387–2–11–32	オリジナル	37	二–77	ガラス乾板　8.2×11.9 cm	F–387–2–12–203	複写
13	二–20	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F–387–2–11–29	オリジナル	38	二–78	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F–387–2–12–202	オリジナル
14	二–22	ニトロセルロースフィルム 8.1×11.1 cm	F–387–2–11–37	オリジナル	39	二–79	ガラス乾板　8.2×11.9 cm	F–387–2–12–204	オリジナル
15	二–23	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F–387–2–11–38	オリジナル	40	二–87	ガラス乾板　11.9×16.4 cm	F–387–2–12–384	複写
16	二–25	ニトロセルロースフィルム 8.1×11.1 cm	F–387–2–11–43	オリジナル	41	二–89	ガラス乾板　8.3×11.9 cm	F–387–2–16–247	複写
17	二–26	ニトロセルロースフィルム 8.1×11.1 cm	F–387–2–11–44	オリジナル	42	二–90	ガラス乾板　8.1×11.9 cm	F–387–2–18–288	複写
18	二–27	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F–387–2–11–51	オリジナル	43	二–92	ガラス乾板　8.1×10.7 cm	F–387–2–4–109	オリジナルの可能性
19	二–28	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F–387–2–11–50	オリジナル	44	二–94	ガラス乾板　8.1×11.9 cm	F–387–2–17–315	オリジナル
20	二–32	ニトロセルロースフィルム 8.2×10.8 cm	F–387–2–14–180	オリジナル	45	二–95	ガラス乾板　11.9×16.4 cm	F–387–2–17–327	オリジナル
21	二–33	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F–387–2–2–151	オリジナル	46	二–96	ガラス乾板　8.3×11.9 cm	F–387–2–17–314	複写の可能性
22	二–35	ガラス乾板　8.2×10.8 cm	F–387–2–2–154	オリジナル			ガラス乾板　8.1×11.9 cm	F–387–2–17–315	オリジナル
23	二–39	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F–387–2–2–155	オリジナル			ガラス乾板　8.2×11.9 cm	F–387–2–18–286	オリジナル
24	二–43	ニトロセルロースフィルム 8.1×10.8 cm	F–387–2–7–65	オリジナル			ガラス乾板　8.2×11.9 cm	F–387–2–18–287	オリジナル
25	二–45	ニトロセルロースフィルム 8.2×10.8 cm	F–387–2–7–68	オリジナル	47	二–98	ガラス乾板　8.2×11.9 cm	F–387–2–9–113	オリジナル
26	二–50	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F–387–2–15–225	オリジナル			ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F–387–2–9–114	オリジナル

表5　歴博写真帳にのみ見られる写真

No.	写真 No.	歴博ネガ	歴博資料番号	ネガの状況	No.	写真 No.	歴博ネガ	歴博資料番号	ネガの状況
1	歴–8	ネガ無し			14	歴–64	ニトロセルロースフィルム 8.2×10.7 cm	F–387–2–10–54	オリジナル
2	歴–17	ガラス乾板　11.9×16.4 cm	F–387–2–1–339	オリジナル	15	歴–65	ガラス乾板　8.2×10.7 cm	F–387–2–11–39	オリジナル
3	歴–27	ガラス乾板　8.2×11.9 cm	F–387–2–3–129	オリジナル	16	歴–66	ネガ無し		
4	歴–54	ガラス乾板　8.0×12.0 cm	F–387–2–8–96	複写の可能性	17	歴–67	ネガ無し		
5	歴–55	ガラス乾板　8.0×12.0 cm	F–387–2–8–94	複写の可能性	18	歴–68	ネガ無し		
6	歴–56	ガラス乾板　8.0×12.0 cm	F–387–2–8–98	複写の可能性	19	歴–69	ネガ無し		
7	歴–57	ガラス乾板　8.0×12.0 cm	F–387–2–8–97	複写の可能性	20	歴–70	ネガ無し		
8	歴–58	ガラス乾板　8.0×12.0 cm	F–387–2–8–95	複写の可能性	21	歴–71	ネガ無し		
9	歴–59	ガラス乾板　8.2×10.8 cm	F–387–2–8–104	複写	22	歴–72	ネガ無し		
10	歴–60	ネガ無し			23	歴–73	ニトロセルロースフィルム 8.2×10.8 cm	F–387–2–6–89	オリジナル
11	歴–61	ネガ無し			24	歴–81	ガラス乾板　8.0×12.0 cm	F–387–2–4–106	オリジナル
12	歴–62	ネガ無し			25	歴–82	ガラス乾板　11.9×16.4 cm	F–387–2–1–346	オリジナル
13	歴–63	ガラス乾板　8.0×10.7 cm	F–387–2–1–332	オリジナル					